

“新たなまちのつくり方”

多摩センターのまちづくり

～（仮称）多摩センター地区まちづくり方針の策定にむけて～

令和5年3月
多摩市



豊かな「多摩センターづくり」のための 「まちづかい」の活性に向けて

「街」という文字は「四通の道なり」、つまり十字路の形が起源とされています。まず人の生活があり、その活動の中で関係が広がり、人の往来という結果が成った、それが本来の「街」のはじまり方でした。近年の不動産開発で使われている「まちづくり」とは、結果成ったはずの人の往来を任意に再現するための考え方です。今から50年前、戦後の混乱から脱するために、誰もが一定以上の水準で生活ができること。そして、いい意味で社会の非効率をなくし生産性を上げること。そんな状態を「豊かさ」とし、「大きな機能」として実装した街が、日本中にたくさんつくられました。多摩センターも、そんな思想のもとつくられた街のひとつです。今日、この場所が構想された当時からすると遥かな未来を生きる私たちは、結果として衣・食・住に大きな不自由なく満たされた生活をおくっています。

2020年に起こった新型コロナウイルス感染症の拡大は、そんな「大きな機能」の弱点をつき、結果、私たちの生活は一変しました。戦後の日本社会を支えてきた一極集中型の社会システムは見直しが余儀なくされ、働き方だけでなく暮らし方そのものが、分散化、多様化の方向にシフトしました。そんな変化の中で、私たちは、既存の大きな機能にギャップを感じはじめています。まだまだ漠然とはしていますが、状況にフィットしきらない私たちそれぞれが抱える小さな不満がさまざまな場所で顕在化しています。

そんなギャップに対するひとつの試みとして、この一年、私たちは「まちづかい」と称した活動をおこなってきました。多摩センターの衣・食・住を満たしてきた大きな機能の外側に、新しい接点となる活動を起こし、小さな機能の可能性を提示してきました。地域におけるちょっとした工夫やコミュニティなど、「まちづかい」の活動を呼び水として、少しずつかもしれませんが、地域に住む人たちから「実はこんなことをやってみたかった」という声が聞こえはじめています。

ただ、何かを「やりたい」という気持ちは、既存のルールに対してとても弱い存在です。「やりたい」を社会で実現するためには、いつだってそれを支える周囲の関係や理解が必要です。そんな関係資産を持っている一握りの人たちは、実現できることかもしれませんが、そうでない人こそが街の中の多数です。これまでの行政の役割は、全体供給を基軸にした大きな機能を維持していくため、例外を起こさないことだったかもしれません。ただ、これからの時代、既存の「街」を引き継ぐ維持・管理だけでなく、変化しつづける街に求められる価値を改めて捉えなおし、多様な「やりたい」という主体的行動を寛容な姿勢で受け止め、新しく活用するための制度やインフラの最適な見直しとはなにかを考え続けることが必要です。

50年前に、豊かな未来を掲げたように、「まちづかい」の先に新しい豊かさを提示したい。多様な生活を後押しできる街。多様な価値観を受け止め、「やりたい」を実現できる街。50年先の私たちが豊かに暮らす「多摩センターづくり」をアウトカムに設定し2023年度以降、活動を活性化していくことで新たな往来が成る「街」の再構築を目指していきます。

令和5年3月 多摩市

Index

1.	はじめに	4
2.	「新たなまちのつくり方」の基本的考え方	6
3.	まちの声を聞く since 2022	8
4.	「まちづかい」の方向性	15
5.	おわりに	20
	資料編1	
	ーエリア現況	
	ー将来のトレンドを掴む	
	ー多摩市の各部署の考え方	22
	資料編2	
	～多摩ラボの視点と「まちづかい」レシピ～	30

本書にでてくるとは

単語	説明
ライフスタイル	それぞれの人生のあり方。人生を構成する衣・食・住・遊・働・育・学などの選択肢のあり方。この場所で生活する人と多摩センターという環境の中にある意味との間にある関係性。
まちづかい	まちでどのように過ごし、まちをどのように使いたいかなど、街という「空間」と「機能」を活用する「時間」のあり方。それぞれのライフスタイルの実現に向けた変化のための広義な活動。
まちづくり	ある目標を設定し、その実現（再現）のための、街の「機能」の定義と、そのために「空間」を設計し、実現すること。
多摩センターづくり	「まちづかい」のための「まちづくり」、「まちづくり」のための「まちづかい」が循環していくこと。また、そのこと自体を目標とすること。これからの時代の豊かさを改めて定義し、それを目標とした街のあり方を考え続けること。ライフスタイル実現のための環境デザインの考え方。
「つかう」側	暮らす人、働きに来る人、遊びに来る人、学びに来る人など、多摩センターという時間に関係する企業および個人主体。
「つくる」側	機能や空間を定義する企業および個人主体。ハードや制度、サービスなどまちを形成する公共事業であれば行政、民間事業であれば民間企業、そのほか地域の団体や個人。
場面（シーン）	街の中に多様なライフスタイルが複雑に組み合わせられた結果起こる象徴的形とそこから受ける印象。
社会実験	前例のない取り組みに対して街の機能を定義するために、一度試行錯誤して事を起こし、そのプロセスと結果から再現に必要な機能や制度を検証する仕組み。
パイロットプロジェクト	大きな変化を設計する際に、起こる結果に対して安全を担保するため、検証範囲に制限を設けて段階的に何度か実施される検証のための活動。その活動を通じ、以降の取り組み内容や他のプロジェクトへの展開、新たな人と人との交流などイノベーションを起こす基幹となるプロジェクト。
ファーストペンギン	結果から見たとき、変化のきっかけとなった行動を起こした企業や個人などの主体。

※「つかう」側と「つくる」側は定義上わけて考えてはいるが、それぞれがどちらの側としても主体となりうる環境デザインが理想。

1.はじめに

策定の背景

■ パルテノン多摩大規模改修

パルテノン多摩大規模改修の検討に伴い、施設の老朽化対策のみならず、ハード・ソフトを含めた周辺施設との一体的な賑わいの創出が求められ、多摩市は、平成29年3月「多摩センターのさらなる活性化に向けた取組み方針」(以下、「方針」という。)を策定しました。

■ 世界的感染症の影響

方針では、東京2020を契機とした取組みが想定されていましたが、令和2年当初から蔓延する、新型コロナウイルス感染症の影響が拡大し、東京2020の延期やそれまで想定していた事業の見直し、多摩センターに訪れる人のライフスタイルも大きく変化しました。

■ 変わりゆく多摩センター

令和5年1月、京王プラザホテル多摩が32年の歴史に幕を下ろしました。多摩美術大学美術館も令和5年3月31日をもって市外に移転します。今後リニア中央新幹線の開通や多摩都市モノレールの延伸など、中長期的な交通網に関する変化も予定されています。平成12年、多摩そごう撤退に続き、立川や南大沢との都市間競争が激しくなった時以来、多摩センター地区経済に追い打ちをかける年度となりました。

■ 公共施設のリニューアル

まちの変化はマイナスなものばかりではありません。多摩市の公共施設もリニューアルの時期を迎え、パルテノン多摩が令和4年7月にリニューアルオープンしたことを皮切りに、令和5年7月に中央図書館が新設、令和7年1月には多摩中央公園のフルオープンを予定しています。また、令和6年度末を目途に都市計画マスタープランの改定を進めており、都市計画を見直す時期を迎えています。

■ 未来に向け、チャンスを生かす

開発から40年以上が経過した多摩センター、行政施策のフェーズ転換と社会情勢の大きな変化が重なる節目となった令和3年度、都市計画の見直しのタイミングをチャンスととらえ、現状の振り返りと今後の進め方を検討しました。令和4年4月多摩市は、「行動指針～多摩センターのこれからのあゆみ方～(令和4年度～令和6年度)」(以下「行動指針」という。)(*)を策定し、[多摩センターの10年、20年先のまちのありたい姿を考える動きをスタートしました。](#)

多摩センターの現状は、
資料編1「エリアの現状」P23へ

* 「多摩センターのさらなる活性化にむけた取組み方針」に基づく『行動指針(令和4年度～令和6年度)～これからの多摩センターのあゆみ方～』(令和4年4月12日経営会議決定)は、令和3年度までの状況を踏まえ、庁内組織「多摩センター地区活性化推進会議」において、課題対応を補完する、トライ&エラーを行動原則とした正解のない時代における行政の動き方・考え方を整理したものの。

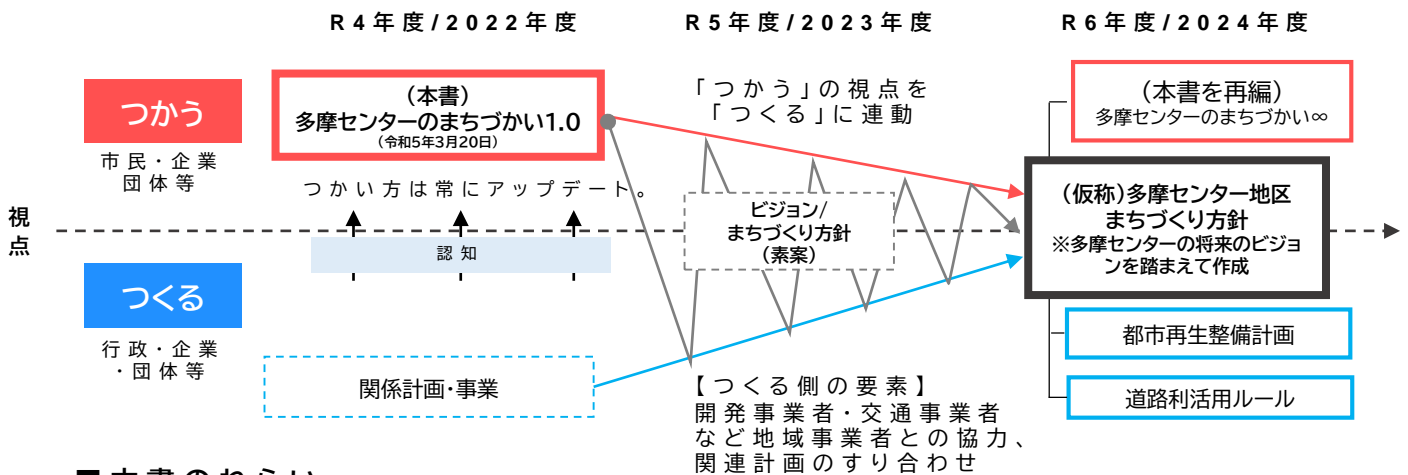


本書の位置づけ

■ 本書の位置づけ

多摩市は、行動指針に基づき、地域の事業者などの協力を得ながら、“まちでどのように過ごし、まちをどのように使いたいか”、まちをつかう視点でまちの声を集めてきました。本書は、令和4年度に行った、多摩センターの「まちづかい」の活動成果をもとに、「まちづかい」の方向性をまとめたものです。令和5年度には、これまでの成果をもとに「まちづかい」のすそ野を広げ、深掘りをし、多摩センターのこれからの可能性とポテンシャルを引き出していきます。それらの要素をもとに10年、20年先の多摩センターのありたい姿として「ビジョン」を設定していきます。並行して、まちづかいを実現の障害となっている構造的な問題や規制を明らかにし、「ビジョン」実現に必要なことを「(仮称)多摩センター地区まちづくり方針」に設定していきます。

【年度別のアウトプットイメージ】



■ 本書のねらい

まちの未来に「あったらいい」場面(シーン)の実現に向け、市民、行政、民間企業が一緒になって取り組んでみるのが、「まちづかい」を起点としたまちのつくり方の第1歩です。一方で、上記の図に示すような方針等の策定を実際に進めるには、都市計画や法令等も複雑に絡み、専門家による調査や提案なども必要です。地域の企業等「つくり」手の合意形成等も当然必要であり、「つかう」側も「つくる」側も共有できる将来像を得るためには、一步一步手続きを踏んで次第に方向性を絞りこんでいくことが必要です。

「つかう」側も「つくる」側もどちらも主体として活動するため、本書を下記のように活用することを期待します。

**市民・団体・企業等
つかう側の
本書の活用方法**

まちでの交流、ちょっとしたチャレンジ、技術の実証等、まちにかかわる切り口を想起するきっかけ

**行政・企業等
つくる側の
本書の活用方法**

まちのつかい方の視点をもとに、つくる側の課題解決、ミッション達成となる切り口を見つけるきっかけ

2. 「新たなまちのつくり方」の基本的考え方

起点

「まちづかい」を起点とした“まちのつくり方”

01 これまでの「まちのつくりかた」

- 高度成長期の住まい問題解決のため、居住環境の良い宅地や住宅を供給することを目的とした多摩ニュータウン計画により、道路整備、鉄道延伸などが進められました。
- 多摩センターでも都市基盤が整備され、未利用地には多くの民間企業、商業、文化・教育施設などが集積し、多機能型都市として、行政・開発事業者等「つくる」側を主体とした「まちづくり」がすすめられてきました。

02 これからの「まちのつくりかた」

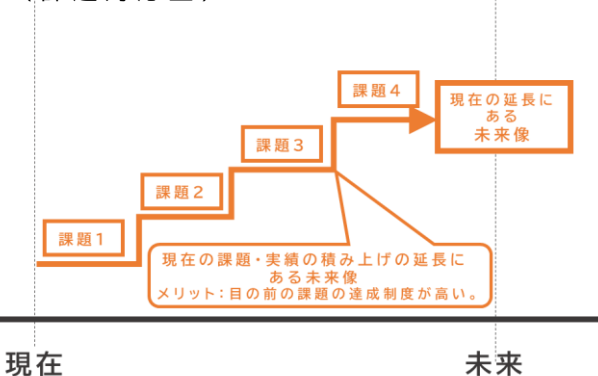
- 多摩センター駅周辺の住宅地に、多くのひとが移り住んでから約40数年が経過。当初最先端だった都市基盤も、社会変化に応じて使い方の前提・想定も変化し、あまり活用されない空間(スペース)も生まれてきています。
- 10年、20年先を見据え、今ある都市基盤(遊歩道・公園・公共施設・商業施設等)の良さを引継ぎ、時代時代にあわせ、誰がどのように使い、多摩センターでどのように過ごしたいか、改めてその価値をとらえなおすことが必要になっています。
- そのためには、従来の整備主体・分野ごとのみでの解決が難しくなっている課題に対し、市民等「つかう」側が主体となって、小さな挑戦を繰り返しまちを作っていく、「まちづかい」を起点とした「まちづくり」が求められています。

アプローチ

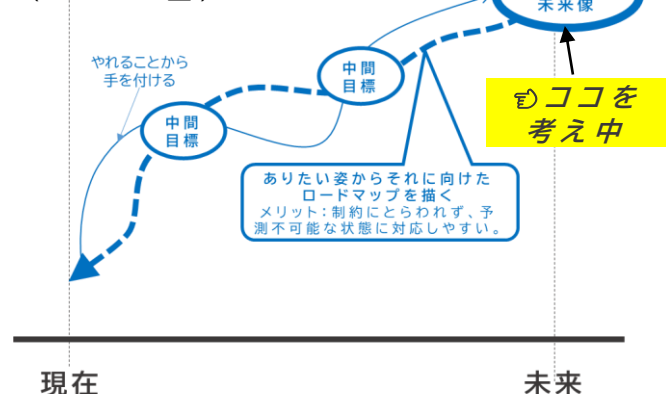
バックカスティングによる「まちのつくり方」

まちの変化が続く多摩センターでは、少子高齢化・環境問題などの社会問題も複雑に絡みあい、分野ごとの「Yes or No」を積み上げる課題対応型のアプローチだけでは解決しきれない「絶対的正解のない問題」が積み残りまちの価値の低下が懸念されました。正解のない時代、まちの価値を維持・向上するため、目指す未来の都市像を描きバックカスティングするアプローチをしていくため、多摩センターの“ありたい姿”(ビジョン)を描いていきます。

フォーカスティング (課題対応型)

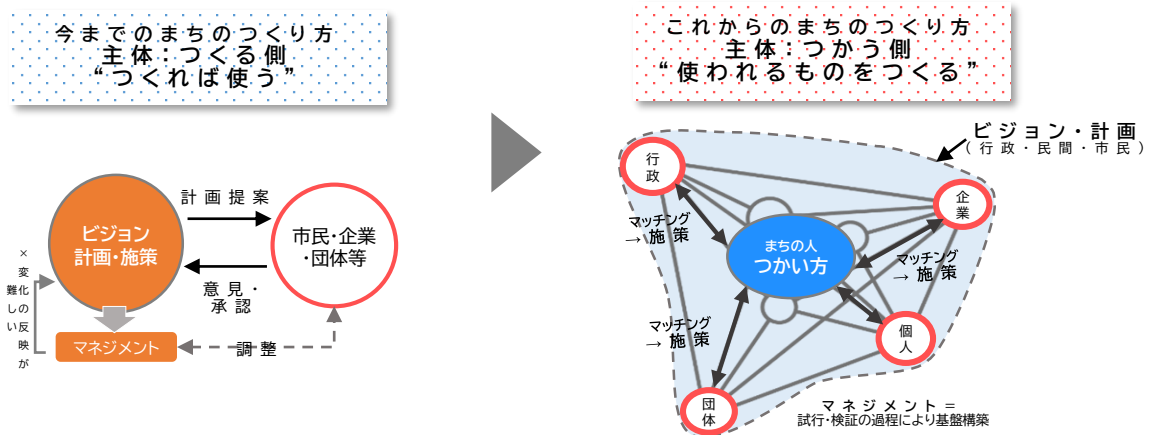


バックカスティング (ビジョン型)



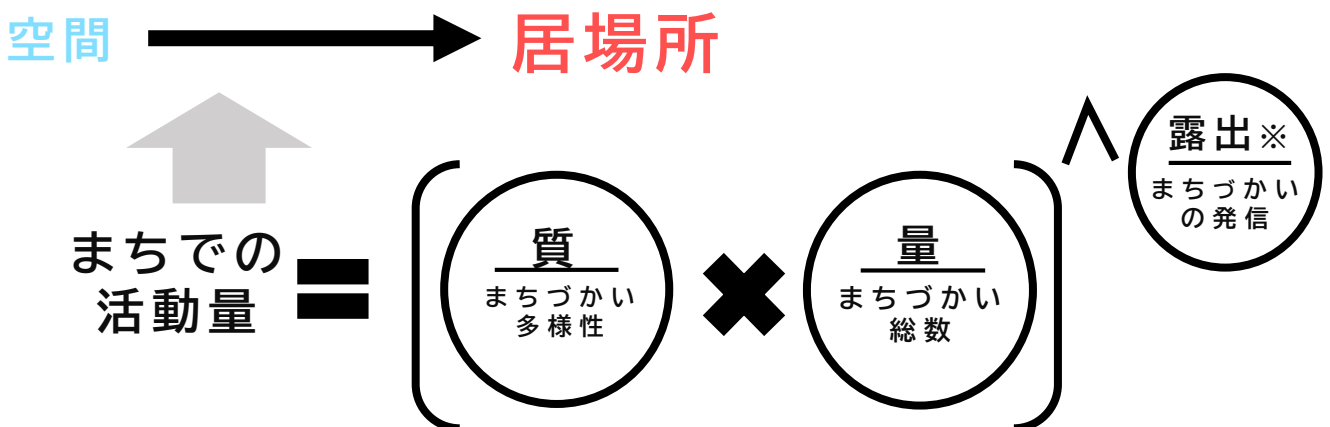
まちの声からつくる「まちのありたい姿」

「まちづかい」を起点として描かれる「まちのありたい姿(=ビジョン)」は、現在の延長線にある未来ではなく、「まちづかいの声」があつまった未来です。令和4年度の活動・検討を通じ、行政主導でつくられたまちを市民が利用するのではなく、市民などの行動(活動)を行政が支援することを通じてありたい姿やその達成に必要な施策を考えていく、市民提案(参加)型でまちをつくっていくことが必要と考えました。



まちづかいの「質」と「量」

デジタルテクノロジーの進化や環境問題への意識の高まりといった時代の変化、そして世界規模の感染禍の影響により、人々の生活様式は分散化、多様化し、まちにもとめる価値も変化しています。そのため、乗降人員やイベント参加者、来館者数などの定量的指標のみでは、訪れる人がまちに「価値」を感じているかを評価することは難しくなっています。今後は、100人が訪れたかどうかだけでなく、一人一人が1つでも多くまちを”つかう”(つかいたくなる)といった視点も重要です。



【質と量を増やす「まちづかい」の切り口】

多摩センターの都市スケールを活用した季節のイベントなど非日常の楽しみ、おしゃれなランチを食べるちょっと特別な日常、家への帰り道に居場所で時間を過ごせる日常など、“空間”と“時間軸”を掛け合わせた場面(シーン)の質と量。

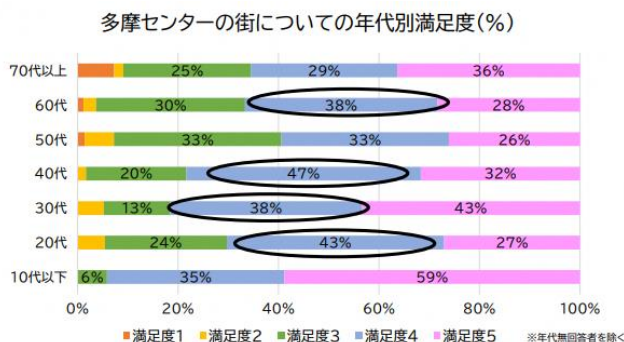
※質と量のそれぞれの数に対しての累乗(^)は、広報・メディアを活用した発信をすることで露出が増え、まちでの活動量が指数関数的に増加する可能性があることを示す。

3. まちの声を聞く since 2022

このまちでどう過ごしている？～パルテノン大通リアンケート～

令和3年度、多摩市は、パルテノン大通りで開催されたマルシェにあわせ、多摩センターを訪れたひとに対し、まちの満足度のアンケートを実施しました。暮らしやすさの好評価の一方で、「街としての目的」や「ワクワク感」「利用すること」への課題や不足の声が多く挙げられました。

アンケート結果はこちらから→



	暮らし	遊び・使う	働き・学び (ビジネス)
多摩センター在住	◎	△	△
来街者(市内・近隣)	○	△	▲
来街者(市外・遠方)	△	▲	▲

どんなまちに居続けたい？～立地企業意見交換会～

令和4年8月、多摩センターに立地する企業との意見交換を行いました。「10年、20年先を見据え、企業・商業施設が居続けたいまち」をテーマのひとつとしたところ、

- ✓ 災害に強い、緑が多い、交通アクセスなど都市基盤の良さの維持・向上
- ✓ 今後の交通インフラの変化、インバウンドの回復、研修等の今後の動向を踏まえ、まちの魅力の向上が必要
- ✓ 魅力あるまちづくりとして、宿泊施設や魅力ある店舗など買い物価値の向上を期待する

といった意見がでました。

どんな風に道路を使っている？～遊歩道の利用実態調査～

令和4年度、市は多摩センター駅周辺の遊歩道の利用実態について市民3,000人を対象にアンケート調査を行いました。令和5年度に、このアンケート調査の回答をもとに、市民ワークショップなどを通して、より自由な遊歩道の利活用を実現する「歩行者と自転車の安全な走行ルール」を考えていきます。



どんな風に公園を使いたい？～パークライフショー～

令和5年3月に3回目を迎えたパークライフショーは、多摩中央公園を市民がより積極的に関わり、多様なつかい方や過ごし方ができる環境づくり「プレイスメイキング」を目的として行った社会実験です。令和7年1月公園改修以降の活用を試行をし、パークライフショーを通じ、市民や公園内施設などが連携し多摩センターエリアの活性化につなげていきます。

多摩センターの未来デザイン検討委員会（仮称）

■ 検討体制

多摩市では、「まちづかい」を起点とした活動を進めていくにあたり、新たな発想を得るため若手担当者のワーキングを設置しました。庁内からの公募により多様な部の職員が参加しています。また、多摩センターのステークホルダーの若手に活動に参加してもらい、多摩センターの未来デザイン検討委員会（仮称）として活動をスタートしました。

■ アプローチ

多摩センターの未来デザイン検討委員会（仮称）では、まちの“ありたい姿（ビジョン）”へのアプローチとして、

- ・どのように声を集めたらいいのか？
- ・どのような聞き方がいいのか？
- ・どんなシチュエーションできくのか？

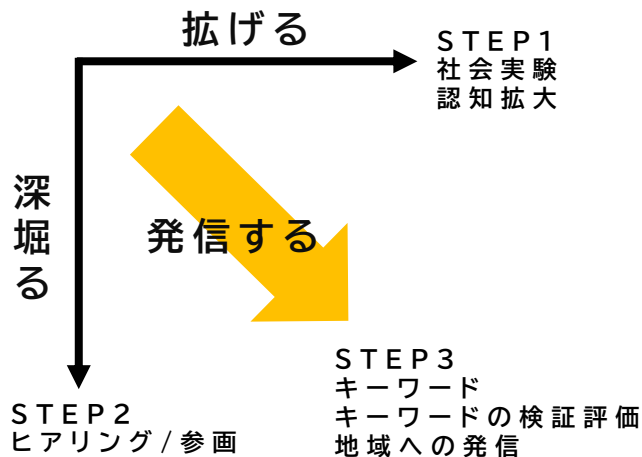
そんな、白紙の状況からスタートしました。「まちづかい」を起点とした多摩センターのあり方を考えるこの過程自体が、多摩センターの新しいチャレンジでした。

満足度の高い「日常の暮らし易さの維持・継続」をしながら、魅力「行ってみよう」「何かしてみよう」「ワクワクする」など魅力的な街の過ごし方、新しい価値をつくっていくことが必要ではないか？

「市民」「事業者」「来訪者」が実際にどのように街を使うか、どんなまちで過ごしたいか、「まちづかい」のリアルな声から具体的なシーンを描いてみよう！



活動方針：「拡げる」×「深堀る」×「発信する」



拡げる：社会実験を体現し認知を拡大（PR）する
深堀る：社会実験等を通じて出会った人の内容を掘下げ、特に参画を意識した対話をする
発信する：拡げる、深堀るを促進するたまた、認知拡大には事前・事後の発信をする

ファーストペンギン
となって社会実験

仲間あつめを意識した
ヒアリング

参画を増やすための
企画応援

2022

7/23 ワークショップ

未来のワクワク
=心に残っている
思い出話をきいてみよう！



共通するキーワードを
もとにわくわくする場をまず
はつくってみよう！

参加してくれた人や
いろいろな人から
深い声を聞く場所がある
と、アイデアがもつとき
けるかも！

背景や関連する情報など
ストーリーを聞き出す、深堀り
ヒアリング！



9/10

火を囲もうin中央公園



10~11月

机を囲もうinパルテノン多摩



公園の新たなつかい方を
大学生が多摩市に提案！ 12/3

公園ロゲイングin多摩中央公園



たま公園
ファミリーロゲイング

好評だった火を囲もう。
やったことのない場所で
チャレンジ！

何気ない会話もい
いけど、「テーマ」を
もって話すともっと
話やすいかも！

何気ない会話をしていると、「多摩
センターで期末テストをして道行
く人に評価してもらったら楽し
い！」という高校生の声！

11/12

火を囲もうinパルテノン大通り



大通りをもっと活かした
い！マイナスイメージのある
傾斜を活かせたらなんでも
できる気がする！

11/27

ピンボールを囲もうinパルテノン大通り



11/30

データを囲もうinパルテノン多摩



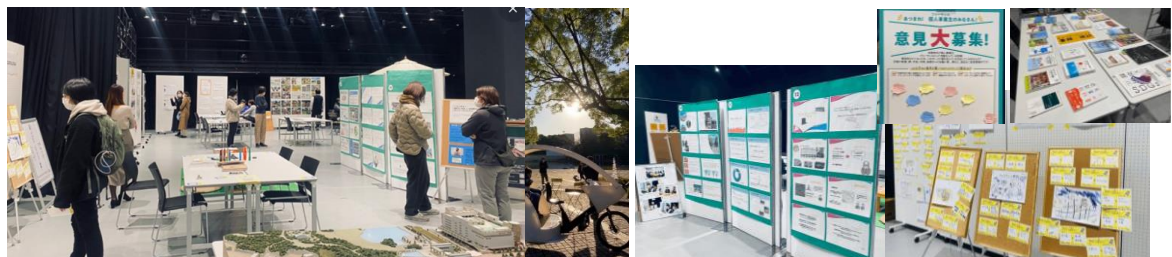
期末テストinパルテノン大通り



12/9

12/10

まちづかい大作戦inパルテノン多摩、多摩中央公園



まちづかい社会実験、仲間あつめ、実践の記録、未来を感じさせる技術
等の展示など、活動を一挙にお見せし(CATALOG)、つかい方(Scrap
Book)をあつめました！

これまでの活動～共感を高める～

あつまった「まちづかいの声」マップ



活動紹介PV
「まちづかいの声からはじまる、
これからの多摩センター」→



まちづかいの声から
イメージした
風景スケッチ →



これからの予感～バディをみつめる～

高校生と大学生が
多摩市長にまちの提案を発表！



京王・URアイデアピッチより
東工大学1チーム



発表した学生と発表を聞いた大人が
地域に実装していく可能性をディスカッション！
最後に、次のアクションを宣言しました。



多摩大学附属聖ヶ丘
高等学校
1年生3チーム



Next action
提案の内容、場所など
まずは小さいトライを
やってみよう！

令和4年度「まちづかい」の声をもとに描くシーン(場面)

令和4年度の「まちづかい」の声をもとに、多摩センターで“みんなのやりたい”まちづかいシーンをイメージし、どのような使い方が考えられるか、実際の場所にデザインしました。現在、多摩中央公園・公園内施設を中心としたリニューアル等、より使いやすい場所とするための制度・ルール of 検討も進んでいます。実際に定期的・定常的に活用される未来に向け、つかい方の共感を広げるには、実行に移していくことが大切です。

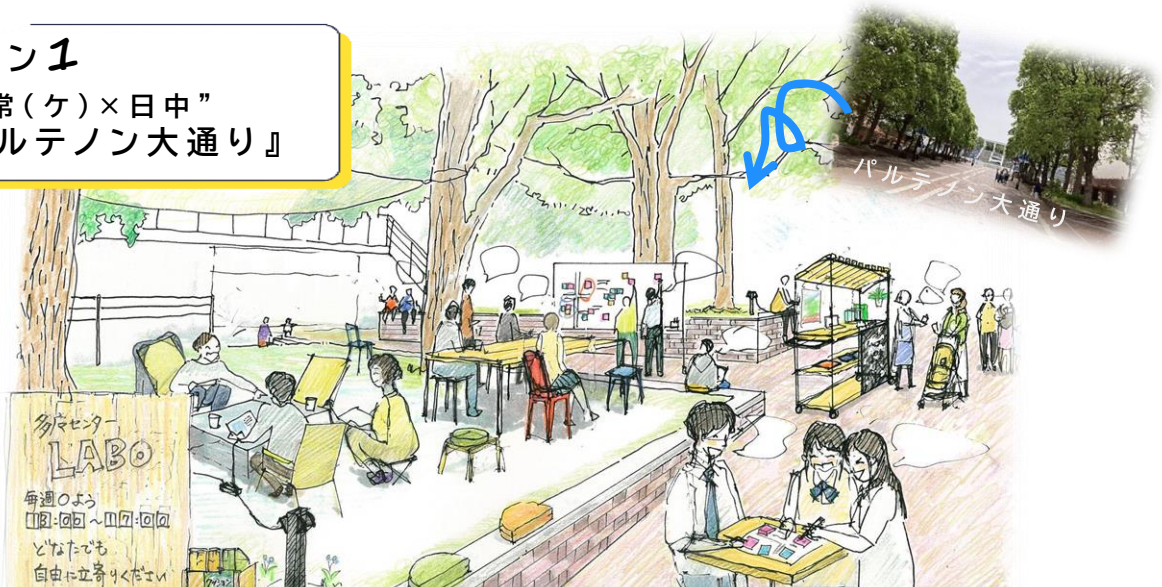
時間帯(昼・夜)と、日常性(日常、ちょっと特別な日常、非日常)を掛け合わせ、具体的な多摩センターの空間(パブリックスペース、民間施設)をあてはめて、実現したいシーンのイメージを絵にしました。これらのシーンは、あたらしい「まちづかい」の拡大とともに増加し、地域の共感をえられるか、障害となる制度等はあるかなどの試行錯誤を通し、地域の”シーン”となるかどうかを探っていきます。

	日常 ～ケ～	ちょっと特別な日常 ～ケのハレ～	非日常・祭り・イベント ～ハレ～
日中	シーン1:パルテノン大通り シーン2:多摩中央公園	シーン3: ココリア多摩センター前 (パルテノン大通り) *パルテノン大通り/オープン期末テスト	シーン4:三角広場 *パルテノン大通り/大型ピンボール
夜	シーン5:駅前ハスローター	*パルテノン大通り/焚き火	
備考	日常の豊かさ、気軽な利用	やってみたいができる仕組みが整っている	にぎわい、ワクワクがあふれる

*は、令和4年度に多摩センターの未来デザイン検討委員会(仮称)が実施した社会実験

シーン1

“日常(ケ)×日中”
『パルテノン大通り』



まちづかい
利用

まちづかい拠点・オープンバージョン・集まる・語る

主な属性

近所の利用者・来訪者・若者・学生・事業者・フリーランス

構成要素

屋外テーブル・ベンチ・ホワイトボード(黒板)・日よけタープ・日よけ・ベンチ・電源設備機器

シーン2

“日常(ケ)×日中”
『多摩中央公園』



多摩中央公園大池付近

まちづかい
利用

公園(広場)活用アクティビティ・飲食スペース・くつろぎ、豊かな日常

主な属性

近所の利用者(散歩、遊ぶ、働く人)・来訪者(子育てファミリー、若者、カップル、学生)

構成要素

水辺カヌーサップ・芝生ヨガ・アクティビティ道具器具レンタル・中のカフェと一体運用展開・ベンチ・飲食テーブル・イス・ペット・散歩・ランニング

シーン3

“休日(ちょっと特別なケ)×日中”
『ココリア多摩センター前』



ココリア多摩センター付近

まちづかい
利用

にぎわい・マルシェ・こどもが遊べる公園・オシャレなカフェ・休憩スペース・公共商業連携や染み出し

主な属性

来訪者(子育てファミリー、学生)・近所のショッピング利用者(周辺住民、隣接市住民)

構成要素

オシャレなマルシェイベント・テナントの屋外出店・キッズパーク・くつろぎスペース・ベンチテーブル・人工芝・日よけ・環境音楽・電源設備機器

シーン4

“非日常(イベント)×日中”
『三角広場／パークライブラリー』



まちづかい
利用

本やアート芸術・事業者チャレンジ・くつろぎスペース・飲食

主な属性

近所の利用者(散歩、遊ぶ)・来訪者(若者、学生、ファミリー)・イベント事業者

構成要素

ブック・本棚・アート・スクリーン・プロジェクションマッピング
アート・人工芝・緑活用(樹木プランター等)・いろいろな座るファニチャー・周辺平場にて飲食用キッチンカー出店

シーン5

“日常(ケ)×夜”
『駅前バスターミナル』



まちづかい
利用

オシャレな食遊オープンバル空間・若者や女性も安心した利用や交流・事業者チャレンジ出店・交通利用者の立ち寄りたまり

主な属性

交通利用者(若者・学生・社会人)・バスや電車利用周辺住民・ベンチャー・フリーランス

構成要素

小分けスペース・オシャレな飲食店舗・仮設プレファブ店舗・チャレンジスペース(短期利用)・商業テナントの染み出し出店・明るいライティング・舗装装飾変更・ゴミ治安対策・交通誘導サイン(壁、足元)

4.「まちづかい」の方向性

「まちづかい」の基本的方向性

多摩センターは、駅、公園、文化施設、商業施設等が遊歩道でつながる、他に類を見ない都市環境です。公共施設のリニューアルでは、訪れる人の居場所となるよう、自由に使える場所、つかい方が拡充した場所も増えてきています。

多摩センターに関するアンケートや立地企業との意見交換から、多摩センターを利用する人々にとっての暮らしやすさの満足度が高い一方で、ワクワク感や街を訪れる目的に課題があることがわかりました。令和4年度のワークショップ、まちづかい社会実験、ヒアリングを通して、まちを訪れる原動力となる「やりたい」の声が少しずつあがってきたこととで、それに応える多摩センターのまちとしての可能性も感じ始めました。また、この可能性を日常的な場面(シーン)としていくには、都市基盤そのものや維持管理、制度や心理的なものなど、さまざまなハードルが原因でチャレンジが簡単でないこともわかってきました。

令和5年度からの活動では、ライフスタイルの拠点をつなぐ歩く道としての機能や余暇を楽しむ場、住んでいる人や働く人の生活に必要な買い物・飲食の機能など、地元の「暮らしやすい街並み」を維持・継続を考えながら、現在から未来にわたり多摩センターに関わる人の「多様なやりたいを活性させる」つかい方を模索していきます。

暮らしている人も訪れる人も
いつもワクワクするまち

多摩センターエリア 「まちづかい」の方向性

居続ける場
暮らしやすい
街並み
(維持・継続)

緑や歩車分離の
遊歩道、生活用品購入できる、
交通アクセスもいいし
暮らしやすい



使い続ける場
多様なやりたい
を活性させる
(付加価値)

やってみたくこと
まちにあったらいいな
少しずつ
聞こえ始めた
まちづかいの声



「つかう」と「つくる」をつなげる

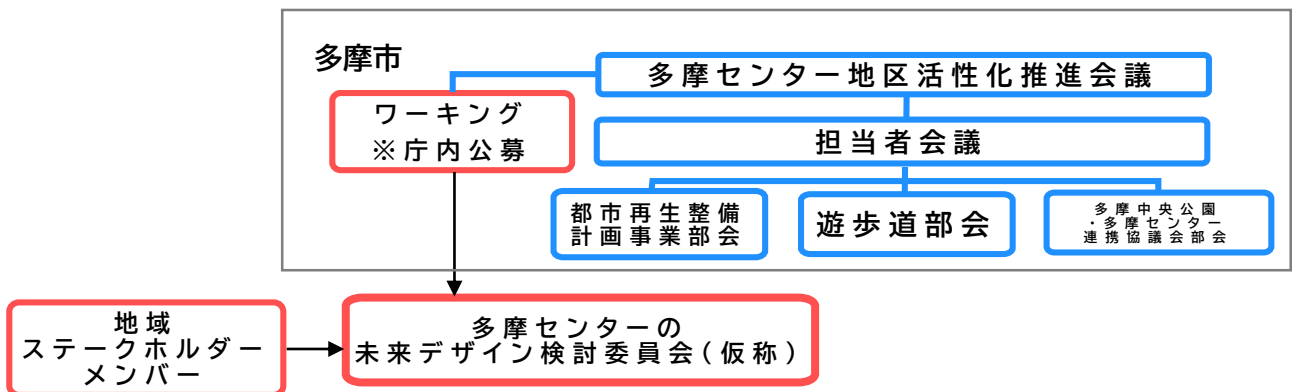
多摩センターエリア「まちづかい」の方向性をもって、多摩センターの未来につなげていくため、次に大切なのは、

「つかう」と「つくる」をつなぐこと。

「つかう」側の声は、多種多様であり、企業、個人、団体などその声の主体は、多岐にわたります。実際にオープンスペースで行われる「まちづかい」が都市政策等につながっていくためには、個人の「つかう」が、仲間や地域を巻き込み、公益化、共益化になっていくことで、「つくる」側ともつながっていきます。

令和5年度からは、行政の都市計画や実行スケジュールの検討に着手します。現在の都市再生整備計画の指定区域などを参考にしながら、「多摩センター駅周辺」における「つかう」と「つくる」のいずれも主体となれる環境デザインを検討していきます。

多摩センターの「つかう」と「つくる」のステークホルダー

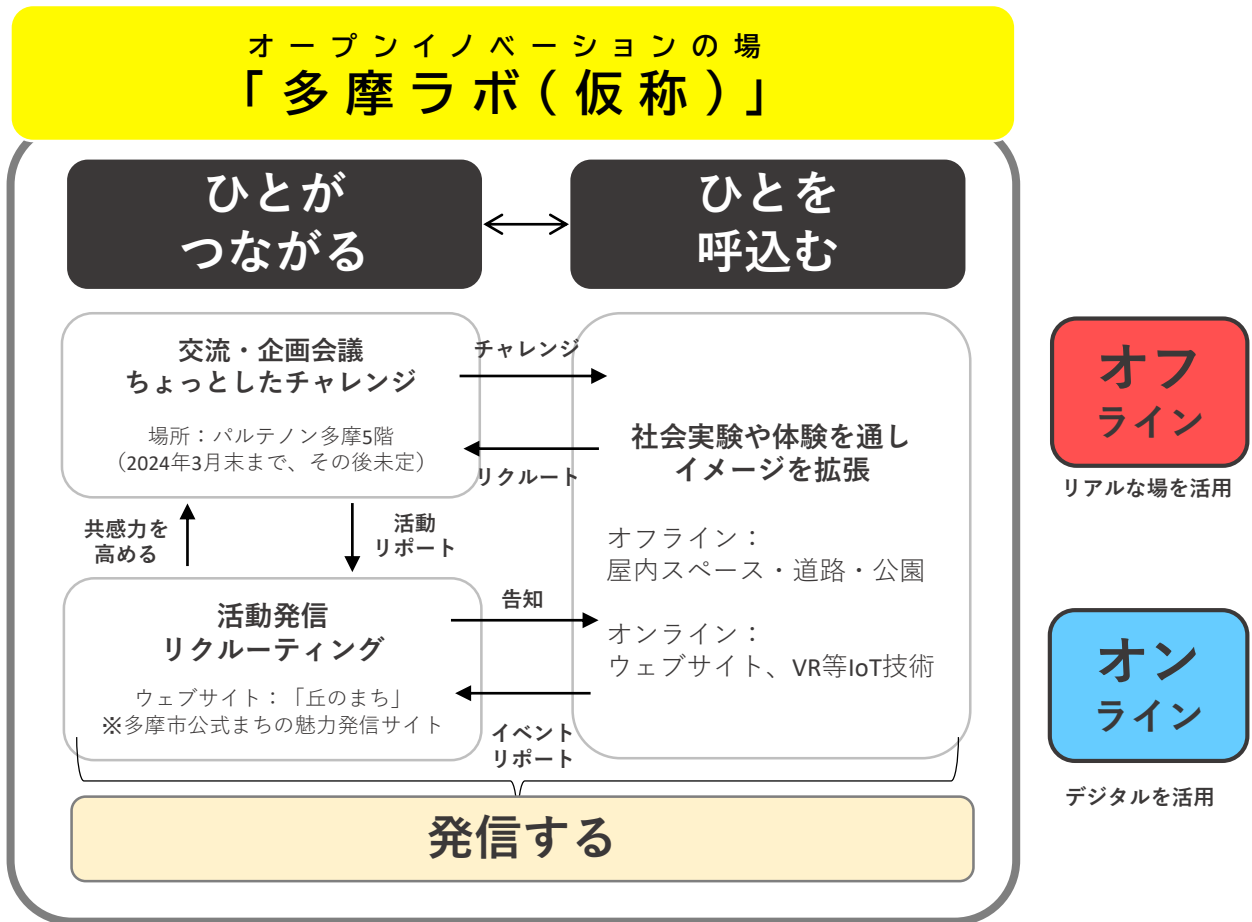


※多摩市は、多摩ニュータウン再生の推進と検討のため、UR都市機構と相互の包括的な連携に関し協定書を締結し、多摩センターのありたい姿の検討のアドバイザーとしての協力を依頼しています。

多様なやりたいを活性させる～「多摩ラボ（仮称）」の設置～

■オープンイノベーションの場「多摩ラボ（仮称）」を開設

多様なやりたいを活性化させるためには、人と人がフラットに交流し、つながり、このまちのやりたいをチャレンジすることが大切です。それを後押しする場としてオープンイノベーション拠点「多摩ラボ（仮称）」（場所は2024年3月まで、その後は未定）を設置します。

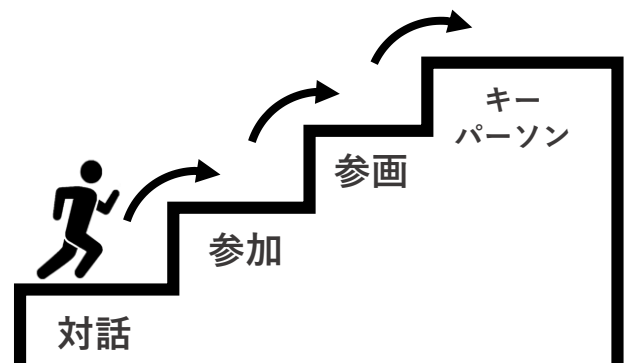


■「主体」のステップアップ

やりたいことがあっても、企画を立てたり、実際に実行したりすることは簡単ではありません。「多様なやりたいを活性させる」ためには、多摩センターに関わる人のまちづかいに対する意識段階に合わせた合わせたアプローチやサポートが必要です。

「多摩ラボ」では、市内外の市民・企業などが、属性にとらわれないざっくばらんな会話からスタートします。意識段階のステップアップを目指し、「主体」の“やりたい”の行動支援を行っていきます。

【「主体」の意識段階のステップアップ】



「多摩ラボ（仮称）」からはじめよう（参加募集）

※具体的な内容、参加方法等は、4月以降にたま広報やまちの魅力発信サイト「丘のまち」などで発信していきます。下記内容も精査しながら運営を開始します。

多摩ラボとは？

これからの「まちづかい」を活性化するため、多摩センターでやってみたいことのチャレンジを後押しする場です。

- 属性にとらわれないフラットな会話
- 実証実験してみたい企画の相談
- 市内外の企業・個人・団体との交流や出会い
- ちょっとしたチャレンジ

令和4年度のチャレンジの詳細はP30「資料編2～多摩ラボ（仮称）の視点と「まちづかい」レシピ～」へ

多摩ラボの機能

「つかう」側も「つくる」側も、フラットな会話、多様な出会い、まちのつくり方へのつながりなどの機会創出を通じて、まちの「まちづかい」が活性



STEP1（フラットな対話）
あったらいいなの
場面（シーン）をイメージ



共感する 仲間づくり

まちへの意識
かかわりの拡張



STEP3（未来への期待）

ハード整備・制度・
サービス等具体的なま
ちの取り組み・機能に
つなげる



STEP2（チャレンジ）
仮説を立て、社会実験
（段階的な試行錯誤）



多摩ラボに 訪れる人への期待

- 多摩ラボにくる人全員が「主体」であること
- 「主体」となってチャレンジした場合は、プロセスや企画書など、今後のチャレンジの参考になるものをフィードバックすること

多摩ラボの視点

令和3年度までの行政施策の振り返りや調査、令和4年度の「まちづかいの声」などをもとに、次年度以降の“多摩ラボの活動の視点”をまとめました。

この視点は、多摩センターのこれからの付加価値をもたらすパイロットプロジェクトを走らせ、まずは「やってみる」ことにより、どのようなものが新たな価値となり、そのためにはどんな機能が必要かの起点となるものです。複数のパイロットプロジェクトを通し、「つかう」側と「つくる」側の思いが一緒になった多摩センターのあり方を探ります。

過去を未来へ #1

今ある資産(道路・公園・施設など)を 活かす目線、わくわくするつかい方の発見

再現不可能な多摩センターの公共空間。歩車分離の遊歩道、そして駅近に公園・商業施設等が集積しています。時代の移り変わりとともに、使う人もつかい方も変化したハードや制度の維持向上には、新たな価値を付加するアイデアを探ることが必要です。「新しいつかい方」、そして「(今ある資産を見る)新たな視点」で考えます。

世代を超えて #2

これまで支えてきた世代と次世代とで一緒に考え、 成長するまちのつかい方

現在の多摩センターをつくってきた世代、育ててきた世代、そして現在の形になってから生まれてきた世代。世代ごとにまちへのかかわり方が異なります。このまちに多様な世代が行きかうリアルをこの先つないでいきます。

地域の中から外から #3

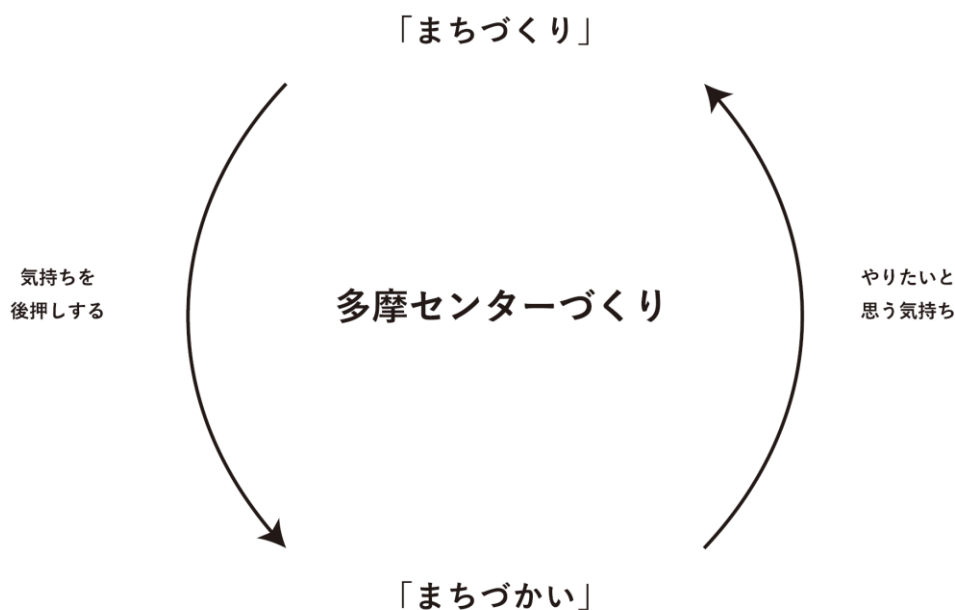
外から人を呼び込むシティプロモーションと、 内なるシビックプライドを醸成するつかい方

多摩センターのつかい手として期待できるのは、次世代だけではなく、10年、20年の間に転入やなにかのきっかけで外から呼び込まれた人もまた、新たな多摩センターの関係人口となります。そのような観点から、多摩センターに人を呼び込む“シティプロモーション”が向上することは、外からの注目度の高い居場所やコンテンツを起点としたブランディングであり、結果的に地域への満足度や愛着を高めることにつながっていきます。

5. おわりに

開発当初、多摩センターには未利用の場所が多く、そこにどんな機能をつくり、それをどのように利用者がつかうのかを考える「余白」がありました。この数十年で、多機能都市として公共施設・道路・商業・業務等の施設整備が進み、衣・食・住・遊などを満たす機能の充実とともに空間的「余白」をみることはなくなりました。そんなまちに出て、まちをつかった社会実験をしてみると、都市基盤が生み出す価値に満たされるものがある一方で、個人や小さな単位で関わりが難しいことに気づかされます。そのなかで、「まちづかい」と称した活動は、既存の「街」を活かし、さまざまな主体が考える多様な価値観を受け止める、新たなまちの「余白」を探すチャレンジでした。

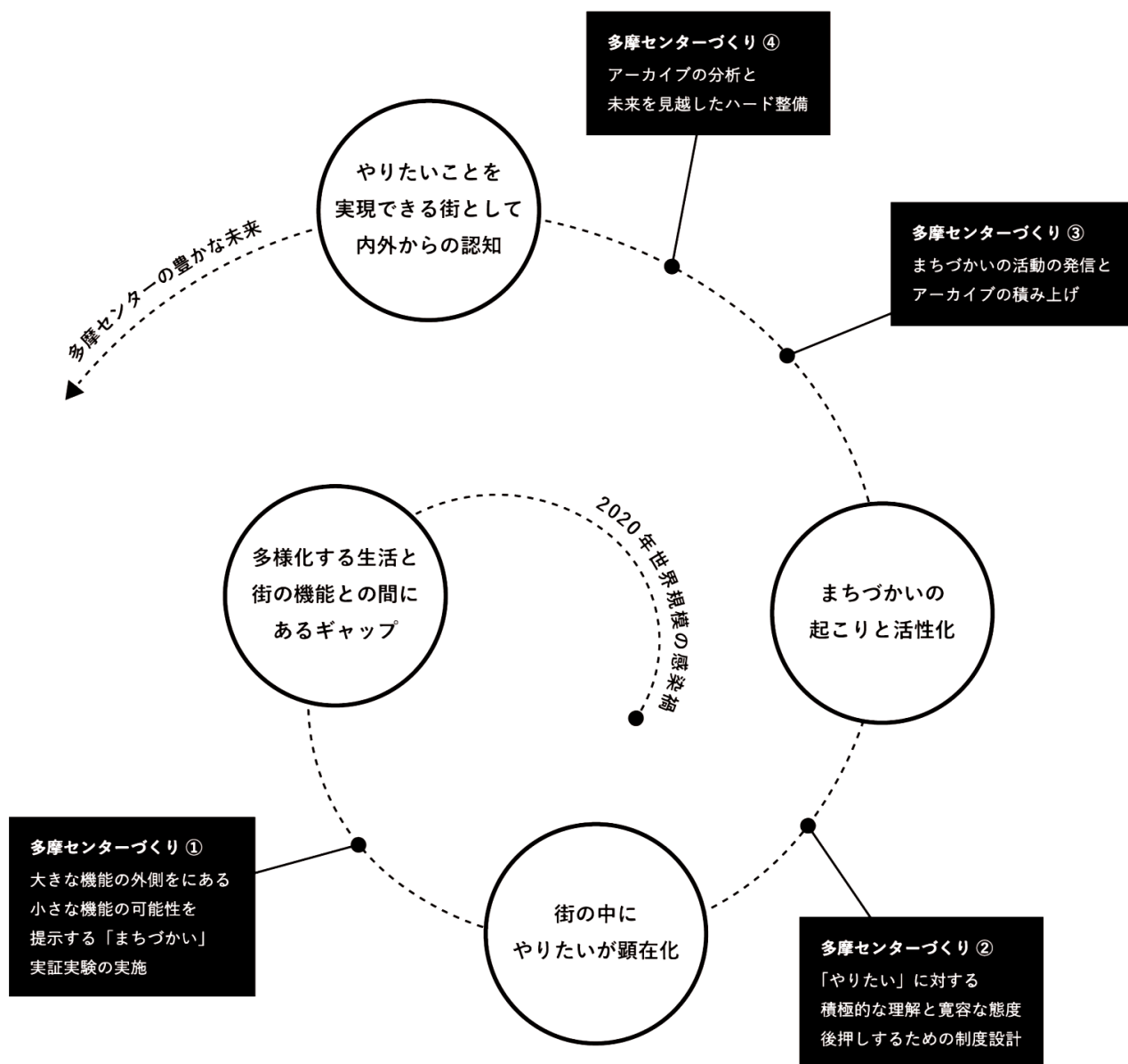
多摩センターの豊かな未来に向けて、「やりたい」と思う気持ちの起こりとその気持ちを後押しする、「まちづかい」と「まちづくり」が循環し続けることが必要です。分散化、多様化した個々人の思うライフスタイルを実現する「まち」の環境デザインを描くためには、これからの時代の豊かさとは“何か”を改めて定義し、それを目標とした街のありたい姿を考え続けることが必要です。



「まちづかいの声」は、これからの多摩センターを考える市民参加・参画の火のおこりです。そして、一つ一つのまちづかいの声を「私」一人だけの想いではなく、地域の問題として、より多くの市民とその想いを共有・共感していく必要があります。そのためにもまずは、「やりたい」の声が1つでも多くあげられ、このまちで顕在化すること。そして、「やりたい」という行動を1つでも多く後押しし、これからのまちに必要な新しい価値を創出していけるか。

令和5年度、そんな「多摩センターづくり」のデザインプロセスの第1歩を踏み出していきます。

「まちづかい」の活性と後押しのための 「多摩センターづくり」のデザインプロセス

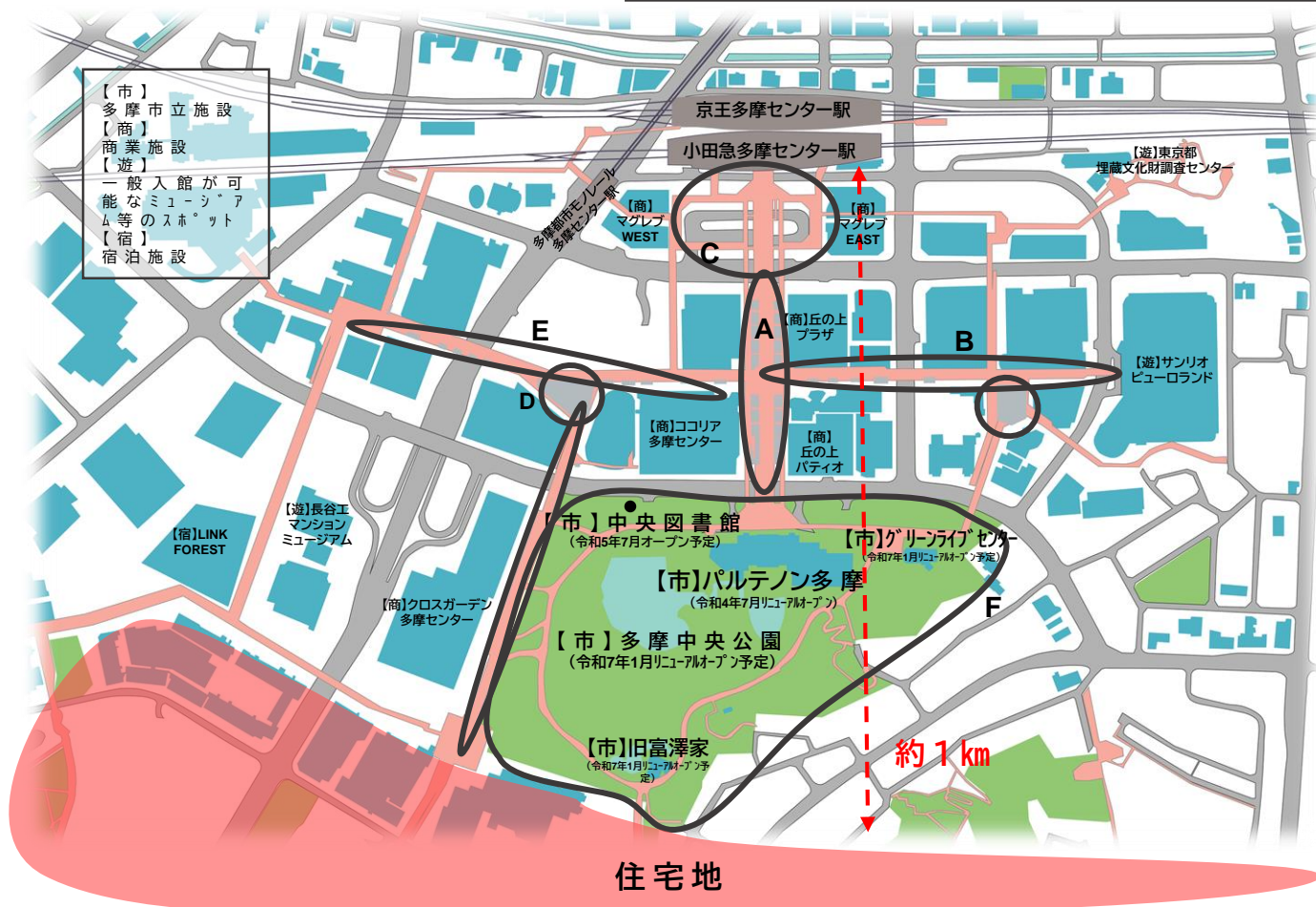
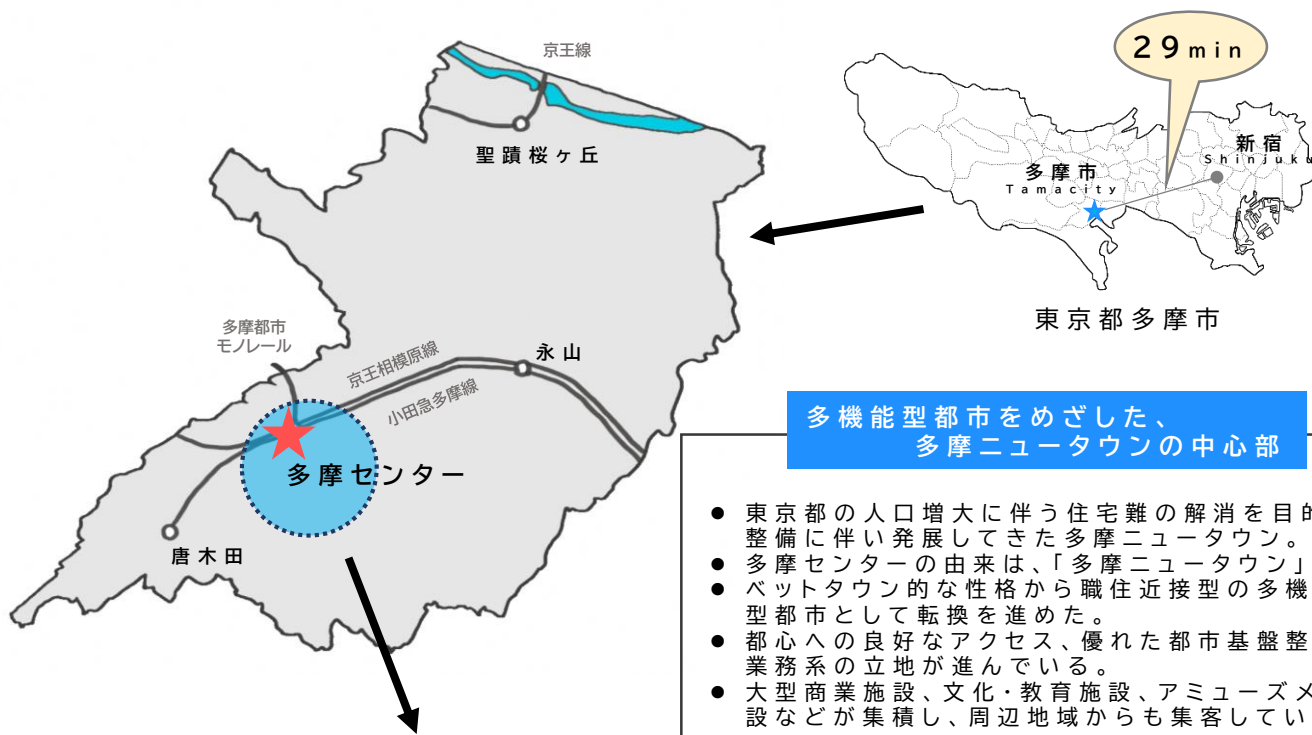


資料編1

- ー エリア現況
- ー 将来のトレンドを掴む
- ー 多摩市の各部署の考え方

エリアの現状

■本書のエリア = 多摩センター駅周辺



01 多摩センターのパブリックスペース(来訪者が行き来できる場所)

多摩センター駅周辺には道路・公共施設・商業施設等、様々なパブリックスペースがあります。現在の使われ方の特性や潜在力から、これからの使い方を考えます。

A パルテノン大通り周辺



【特性/潜在力】

- ・ 幅員40m、駅とパルテノン多摩を直線につなぐ全長約330mの道路。
- ・ 地域活性化団体が、季節のイベントやマルシェなどの開催。
- ・ パルテノン大通りから全長約42kmの遊歩道は、商業施設や周辺企業、住宅地に続く。
- ・ 大規模商業施設に接道する主要動線。

B ハローキティストリート しまじろう広場周辺



【特性/潜在力】

- ・ 観光客がサンリオピューロランドへ向かう動線、商業施設、銀行、病院、事業所などが隣接(ハローキティストリート)。
- ・ ベネッセコーポレーション本社ビルとハローキティストリートの間の道路空間(しまじろう広場)。
- ・ パルテノン大通り付近のエリアが主に季節のイベントなどで活用、装飾街路灯にはシンボルであるハローキティとしまじろうのフラッグを掲出。

C 駅前・バスロータリー周辺



【特性/潜在力】

- ・ 京王線、小田急線、多摩都市モノレールの3線の駅が立地。
- ・ バスロータリー、タクシー乗り場、空港バスなどが乗り合う交通結節点。
- ・ 駅ビルにはマルシェや駅前にも商業施設が立地。
- ・ 多摩都市モノレール駅の横には、かつての管路収集センター(現鶴牧倉庫)が立地している。



D 三角広場~レンガ坂



【特性/潜在力】

- ・ 当初は、屋外ライブステージとして活用されていた。
- ・ ステージは石、バックの壁には水が流れる機能がついている。
- ・ 令和5年7月、中央図書館とレンガ坂がオープンし住宅地やレンガ坂に接道する商業施設への動線として人流増加の可能性あり。

E パルテノン大通り十字路西側



【特性/潜在力】

- ・ パルテノン大通り十字路西側から東に延びる動線。
- ・ 商業施設を抜けると、住宅地に向かって事業系ビルが立ち並ぶ。

F 多摩中央公園・公園内施設



【特性/潜在力】

- 駅からパルテノン大通りで直線でつながる多摩市最大級の公園「多摩中央公園」。
- 公園内のパルテノン多摩は令和4年7月リニューアルオープン、同館内には新たにこどもひろばOLIVEが開館(令和4年3月)。
- 令和5年度以降は、中央図書館(令和5年7月オープン予定)が新設、あわせて隣接するレンガ坂もリニューアル。旧富澤家・グリーンライブセンターを含め、令和7年1月には公園がフルリニューアルオープン。
- これらのリニューアル・新設に合わせて、来訪者の居場所となる滞在空間や活動空間が拡大。
- リニューアルオープン後は、指定管理者制度を活用し、利用者の利活用へのきめ細やかな対応を実現。

【商業、エンタメ、文化、宿泊などさまざまな民間施設が集積】



ココリア多摩センター



丘の上プラザ



丘の上パティオ



サンリオピューロランド

© 1990 SANRIO CO., LTD. APPROVAL No.P1403108



東京都埋蔵文化財調査センター



長谷エマションミュージアム



LINK FOREST(研修宿泊施設)
(KDDIミュージアム、KDDIアートギャラリー)

↑上記以外にも、駅直結、住宅地に隣接する商業施設などが立地。

02 多摩センターの立地企業

多摩センターの一つ大きな特徴として、立地する企業が多いことがあげられます。多摩センター駅から500m～1km程度の近距離に、業務系施設が数十社立地します。

多摩市では、企業立地促進制度(令和3年度まで企業誘致条例)を設置し、企業の立地を促進しています。多摩センターに立地した施設は、同制度を利用した延床面積が大きい企業だけでも8社9施設(一部「01多摩センターのオープンスペース(来訪者が行き来できる場所)」あり)にのぼります。

■まちへの(からの)交通

多摩センターは、鉄道3線(京王線、小田急線、多摩都市モノレール)が乗り入れ、駅前にはバス停・タクシー乗り場など交通結節点となっている。また、南に尾根幹線、駅近くには多摩ニュータウン通り、商業施設には共同駐車場が併設され自動車による多摩センター利用も多くなっている。

駅	乗降人員(1日の駅別乗降人員)		
	令和元年度	令和2年度	令和3年度
京王多摩センター駅	90,353	58,026	65,805
小田急多摩センター駅	51,315	31,339	37,375
多摩センター駅	37,449	19,483	25,271

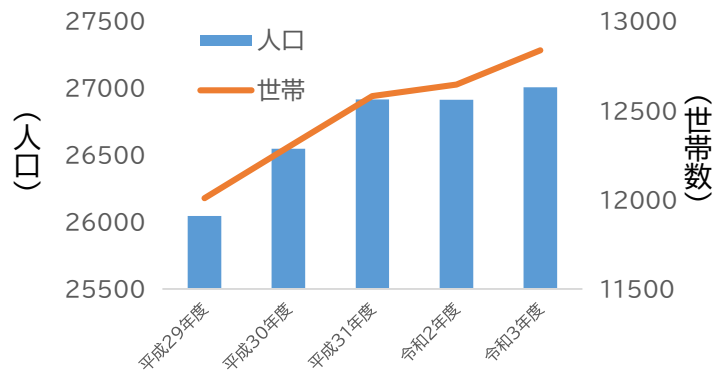
■まちをつかう人

【人口・世帯数】

駅周辺のマンション建設などが住居建設が進んでいる多摩センター駅周辺では、人口、世帯数ともに増加傾向(右図)となっている。

※住民基本台帳(町丁目:山王下一丁目、豊ヶ丘1・2丁目、落合1・2・3丁目、鶴牧1・2・3丁目、愛宕3・4丁目)

多摩センター駅周辺※の人口・世帯数

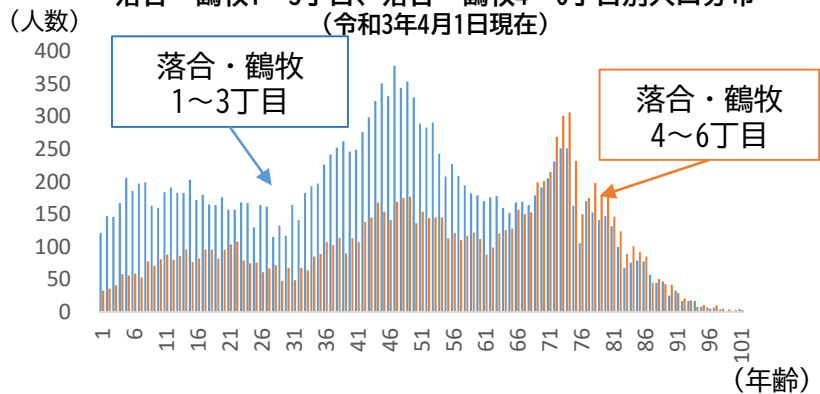


【町丁目別年齢構成】

多摩センター駅南側エリア(落合・鶴牧1~3丁目)では、6~7割が40代以下が居住する。一方で、多摩ニュータウン開発時に入居が進められたエリア(落合・鶴牧4~6丁目)では、高齢化がすすんでいる。

※多摩市公式Web住民基本台帳人口データより

落合・鶴牧1~3丁目、落合・鶴牧4~6丁目別人口分布(令和3年4月1日現在)



【人流データでみる滞在人口】

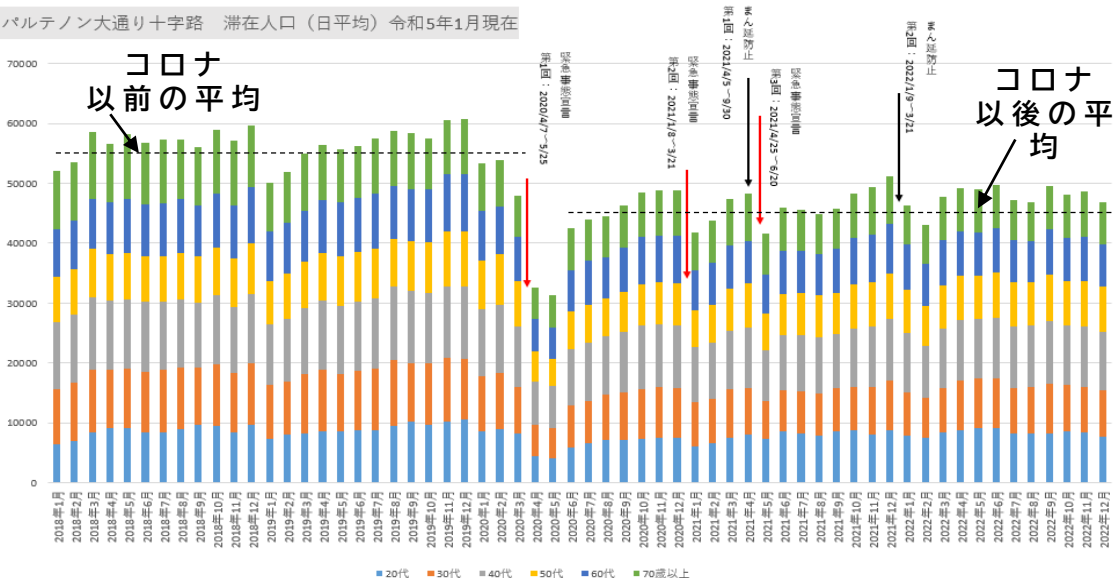
人流分析ツールをもとに、多摩センター十字路の500m圏内の人流状況を見ると、コロナ後、人の流れが大きく変化し、1日平均滞在人口が減少していることがわかります。また、来街者属性(居住者、勤務者、来街者)別にみると、特に勤務者の減少要因は、在宅勤務など出勤が減少したことに伴うものであることが推測されます。

検索条件:
パルテノン多摩十字路を中心とした半径500m以内、15分以上滞在人口



来街者属性	居住者	勤務者	来街者
2018年日平均(人)	6160	9613	41463
2022年日平均(人)	6163	6037	35781
増減数(人)	3	-3577	-5682
増減率	100.06%	63%	86%

パルテノン大通り十字路 滞在人口(日平均) 令和5年1月現在



データ抽出: KDDI Location Analyzer

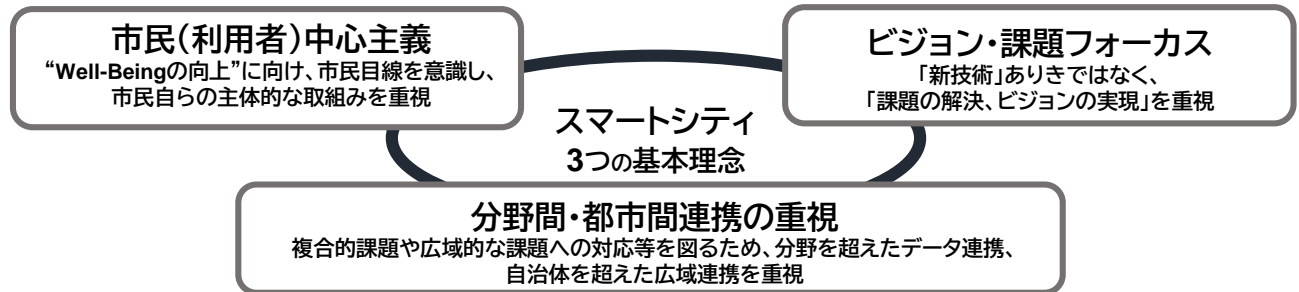
将来のトレンドをつかむ

■ スマートシティ

人口減少、少子高齢化、感染症リスクなど社会課題が複合的に絡むなか、“コロナ”を契機としたデジタル化の潮流をうけ、政府は、新技術や各種データ活用をまちづくりに取り入れたスマートシティの推進をSociety5.0、ひいてはSDGsの達成の切り札として推進しています。また、東京都でも、デジタルの力で東京のポテンシャルを引き出し、都民のQOLの向上を目指す「スマート東京」の実現を目指しています。また、地域にむけ、令和4年度より新たに、区市町村、大学、地域に寄り添う民間企業等の連携のもと、地域特性や資源を活かし、まちのスマート化を通じた地域の課題解決に資する取組への支援を行っています。令和4年度同事業の対象地域として、市民自らの取組みを重視している多摩センターがエリアとして選定されました。

東京都「スマート東京の推進」

Web: https://www.digitalservice.metro.tokyo.lg.jp/news/2022/202208_007.html



参考:内閣府・総務省・経済産業省・国土交通省・スマートシティ官民連携プラットフォーム「スマートシティガイドブック(概要版)」より

■ 次世代を担う若者

変化が続く多摩センター。多摩センターにおける都市整備がひと段落し、モノレール等も延伸しているであろう、2040年頃、このまちを担っているのは、1996-2005生まれの「Z世代」で、インターネットが普及したデジタルネイティブです。コミュニティ形成はSNS、常にデジタルでの情報受信・発信をしています。

人と人との
つながり

SNSや動画など拡張性の高いネットツールを使いこなし、情報や自己発信などを行い、社会や家族、友人などとつながっている。

消費傾向

時間対効果(タイムパフォーマンス)を意識し、モノよりも体験(コト)やデジタルなどを活用したトキ消費。SDGsを学校で学び、エンカル消費などが身近に。

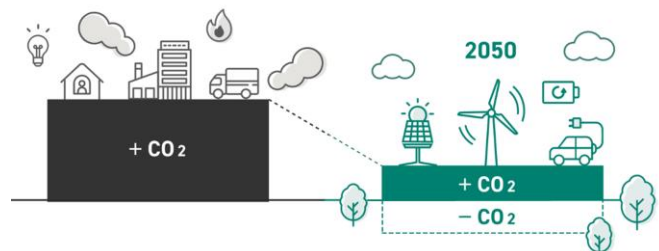
就労傾向

家庭や趣味との両立、パラレルキャリア、職場環境などライフワークバランスを重視。SDGsや社会貢献度など多様な価値観で判断。

■ ゼロカーボン

2020年10月、政府は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、カーボンニュートラルを目指すことを宣言しました。日本各地で脱炭素ドミノを起こすべく、2030年までに民生部門の使用電力の脱炭素化を先行して進める『脱炭素先行地域』を少なくとも100か所選定することとしています。東京都もまた、世界的大都市の責務として、「ゼロエミッション東京戦略」を2020年に公開し、脱炭素による持続可能な社会システムの構築を打ち出しています。

脱炭素施策として、企業や大規模施設からの技術的アプローチによる排出削減とともに、市民の生活におけるCOOLCHOCIEやサステナブルファッションなど、経済を両立した生活に関する啓発運動も推進しています。



多摩市の各部署の考え方～新しいまちのつくり方にむけて～

01 新たな考え方の手法とした内容

■ シティセールス



上記のブランドビジョンは、多摩市市制施行50周年を機に、「課題対応型」に加え、目指す「未来の多摩市」の都市像を描きバックキャストिंगすることで、市の施策や事業に活かしていく「ビジョン型」の検討をしていくため、普遍的価値観を定めたブランドビジョン「くらしに、いつもNEWを。」が策定されたものです。また、このスローガンに基づき、一橋大学の学生がフォーサイト(未来洞察)という手法により考えた多摩市の2030年のシナリオ動画を多摩市公式Youtubeで公開しています。



参照：＜東京都多摩市市制施行50周年＞多摩市新ビジョン「くらしに、いつもNEWを。」を実現させるため国立大学法人一橋大学（鷲田祐一教授研究チーム）と多摩市未来シナリオの調査研究をスタート（2021年12月23日 多摩市、国立大学法人一橋大学）

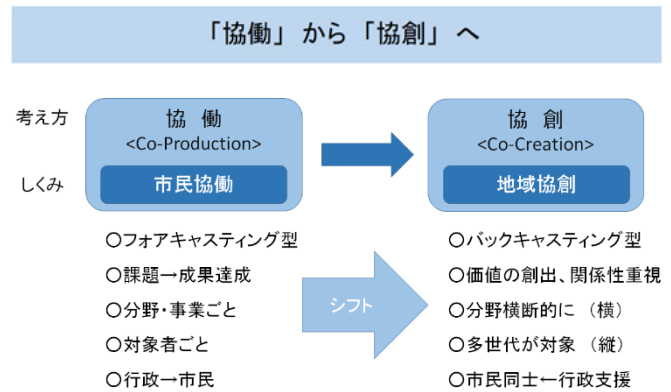
多摩市公式Youtubeへ



■ 地域協創

多摩市は、早くより「多摩市自治基本条例」を定め、市民参画、協働推進など行政施策への市民の関わりを推進してきました。しかし、高齢化の進行、課題の複雑化・多様化、コロナ禍などで、これまで進めてきた「参画」、「協働」が頭打ちになりつつあり、市民との協働によるまちづくりを将来にわたって持続していくためには、新たなしくみが必要として、多摩市が考えているのが「協創」の考え方です。

「協創」の仮の定義は、地域ごとの特性に応じてニーズや手法が異なり、多世代・分野横断した互いにもてる力を発揮する環境をつくり、その活動を支えていくことで、「参画」を促進し、「協働」によるまちづくりを進化させていくことです。



02 多摩センターに関連する主要施策

■ 多摩ニュータウン再生

多摩センターは、多摩ニュータウンの「中心」として開発が行われてきました。その多摩ニュータウンも初期入居から50年が経過し、団地・都市基盤の経年劣化などに伴う課題が顕在化してきています。多摩市は、平成28年(2016)年3月に「多摩市ニュータウン再生方針」を策定し、初期入居地区である諏訪・永山地区まちづくり計画や南多摩尾根幹線沿道の土地利用方針の策定など、具体的施策に着手しています。



■ 子育て応援



多摩市では、全国初となる、子ども・若者の権利を大切にすることや、何か困った時の支援、だれもが自分らしく輝き、活躍できるまちを目指す条例をつくりました。この条例を基盤に、安心して子どもを産み育てられる環境づくりを進めるため、妊娠・出産・子育ての切れ目のない相談・支援体制や、全国的にも珍しい、全ての認可保育園が参加し、自らの保育環境の質を評価し、レベルアップを図る取り組み、広い園庭を持つ幼稚園があります。住環境の面では、まち全体がまるで公園とを感じる「都市と緑の調和した子育て環境」や、ニュータウンエリアにある、長い歩車分離の遊歩道は、安心・安全で、子育てにやさしいまちを実感することができます。

また、子ども・若者の考えをまちづくりに活かすため、気軽に意見の言える仕組みがあります。このまちをフィールドにして、子ども・若者が楽しめる環境の整備を進めています。

■ 環境共生

令和2年6月25日、多摩市と多摩市議会と共同で多摩市気候非常事態宣言を表明し、『2050年までに二酸化炭素排出実質ゼロ』を目指すことを宣言し、環境省からゼロカーボンシティとして認定されています。地域冷暖房システムの導入や管路収集センターによるごみ収集など環境政策の最先端も走っていました。京王・小田急多摩センター駅前の階段には、多摩センターの親善大使であるハローキティをデザインに起用した、脱炭素社会実現を呼びかける装飾を施し、環境問題を考えるきっかけを地域に展開しています。

クールチョイス

脱炭素社会実現に貢献する、地球温暖化対策に資する「賢い選択」をしていこうという取り組み



■ 健幸まちづくり

多摩市は、多様な世代が交流し合い、誰もがいきいきと自分らしく暮らすことのできるまち「健幸都市(スマートウェルネスシティ)」を目指しています。健幸まちづくりは、「健幸都市・多摩」の実現に向けて、行政だけでなく、市民、NPO、団体、事業者、大学等がともに進める、まちぐるみのチャレンジです。

多摩センター地区では、多摩市の賑わいの中心地として、多様な世代の声に基づき、日常的な賑わいの創出に向けた実験を行っています。また、多摩市ならではの歩車分離された遊歩道を活かしたウォーキングの推進、パルテノン多摩や多摩中央公園の改修と合わせた都市全体の回遊性の向上の取組など、意識しなくても自然と歩きたくなるまちづくりを行っています。

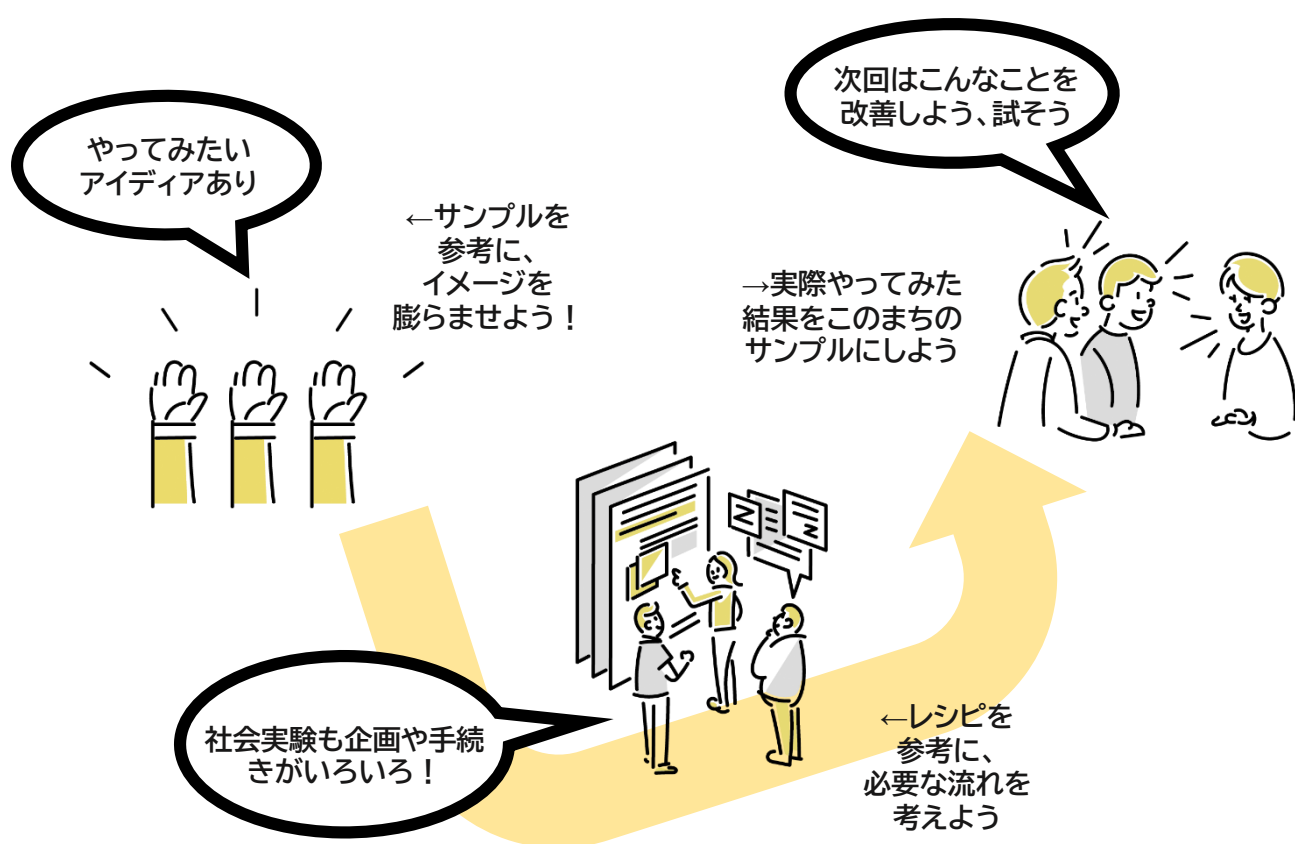


新たなチャレンジで
バージョンアップ

資料編2

～多摩ラボの視点と「まちづかい」レシピ～

※本サンプルとレシピは、既存団体や行政が中心となって実施したものであり、個人のみでの実施にハードルを感じる可能性があります。オープンイノベーション拠点「多摩ラボ(仮称)」(P178)ではそういった心理的・制度的ハードルを緩和する機能を目指し、「やりたい」の声を集めています。



用語解説

サンプル

令和4年度の多摩センターの未来デザイン検討委員会(仮称)の活動や既存団体による先行活動等の事例集。

レシピ

これからまちを使いたいけど、やりかたがわからない人が、具体化のイメージを膨らませるために手順と秘訣を「サンプル」をもとに作成。

過去を未来へ #1

今ある資産(道路・公園・施設など)を
活かす目線、わくわくするつかい方の発見

サンプル：R4年度「まちづかい社会実験」

多摩センター未来デザイン検討委員会(仮称)が主催した、「まちづかい社会実験」は令和4年度、計3回開催されました。7月23日に実施したワークショップでできたキーワードをもとに、検討委員会がたてたはじめての企画が9月10日に開催された「多摩センターで何囲む?“火を囲もう”in多摩中央公園」。公共空間にはさまざまな規制があるなか、将来的に実施できる可能性をさぐるため行ったチャレンジです。

この社会実験は、レシピの①～⑦を繰り返し行い、イベント毎に新たなチャレンジをしている。公園の次は道路でできないかと11月12日には「多摩センターで何囲む?“火を囲もう”inパルテノン大通り」を実施。また、丘陵地にある多摩市でたびたびマイナスイメージとして取り上げられる「坂」を活かせないかと、「ピンボールを囲もう”inパルテノン大通り」を開催しました。

【実例サンプル1】R4.9「まちづかい社会実験“火を囲もう”」



イベント企画時に作成したイメージ図(案)

【実例レシピ1】R4.9「まちづかい社会実験“火を囲もう”」

① やりたいことを思いつく

夜に公園や大通りで火を使って集まり楽しみたい。そんな発想からスタート。

② 企画を立てる

アイデアを膨らませ、「たき火、火の体験、夜遊び、仲間づくり、飲み食い」というアイデアワードが生まれた。人が集まれる場所として、「公園や大通りの木の下」「土曜日の夕方～夜」ににぎわいある空間にしたいと発案。

③ 企画を詰める

出てきた企画アイデアをブラッシュアップします。今回は「焚き火、七輪で焼きマッシュマロ、火付け体験、座談会、ライトアップ、アウトドアリビング、フリーコーヒー」コンテンツに決定。次にコンテンツを元に、打合せを重ねて企画概要書(*)を詰めます。

※企画概要書には『目的、日時時間、予算、コンテンツ詳細、スケジュール、役割分担、運営体制、当日の流れ、現地配置図、動線計画図、準備リスト、申請先リスト』を記入



新たな取り組みをすると、制度や人手、予算等、現実的な問題にぶつかります。実現できないことにこだわらずまずはやってみることが大切。そこから新しいアイデアや知恵がわいてきます。

④ 必要な手続きをする

企画概要書(特に現地配置図や動線計画図)の作成まで終わったら、公的機関への許可申請(*)の手続き、保険対応、関連団体への確認等を行います。



公共空間を使ってなにかをしよう!とすると、手続きが多かったり、そもそも使えないといったことも。事前に進め方を把握していると手間が減ります。

⑤ 参加者の募集、準備をする

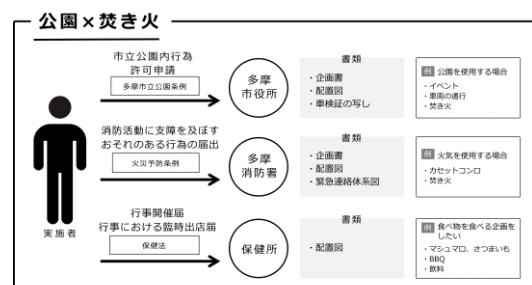
告知用チラシを作成。市のHPや専用のnoteを活用したり、SNSを活用して告知発信。当日も道行く人へのチラシ声掛けも効果があります。

⑥ 当日実施、振り返る

当日は主体が楽しむことをベースに、各役割は意識して対応しながらも、臨機応変に参加者との対話する時間を大切にしました。企画終了後は、企画で妥協したこと、実現が難しかったこと等を振り返り、企画の改善や新たな次のアイデアをまとめます。

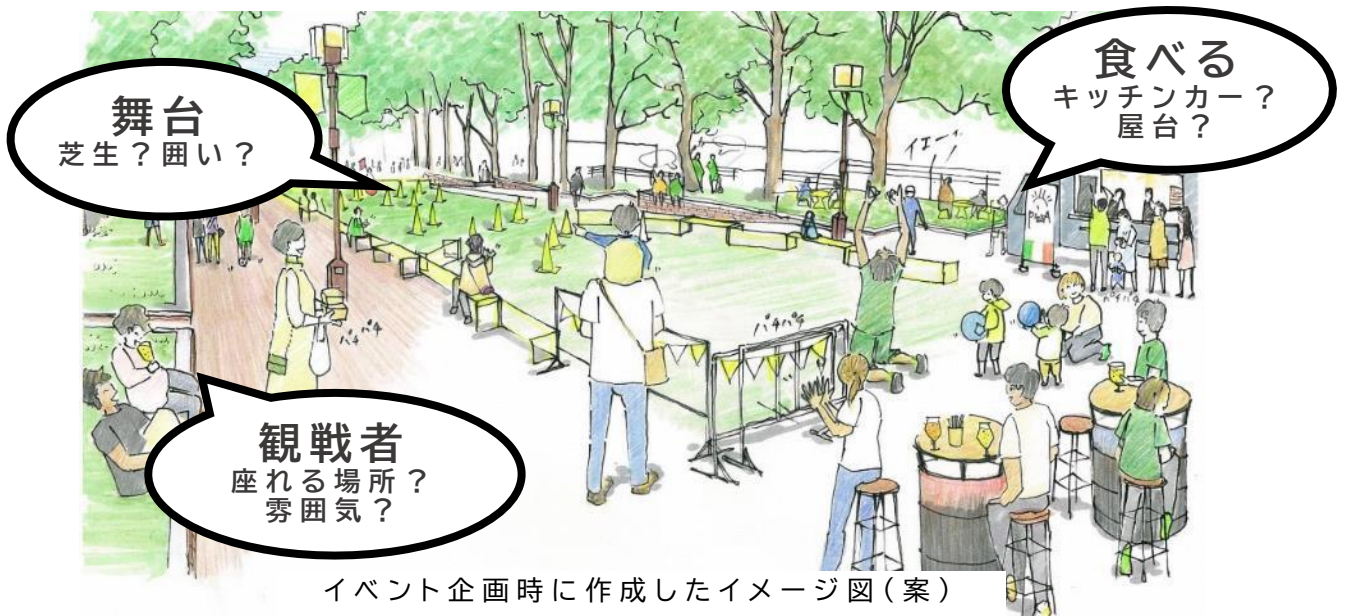
※公的機関への許可申請先表

多摩センターの未来デザイン検討委員会(仮称)が実際に行った9月10日の「多摩センターで何囲む?“火を囲もう”in多摩中央公園」では、右図(公園×焚き火)のような手続きが必要でした。



POINT ※公園での焚き火は、地域活動などの公共性があるイベントでのみ許可が下ります。例えば、どんと焼きは地域行事であるため、公共性があると認められて許可されています。ただし、延焼防止や公園施設の保護(横けき防止)等の措置は、公共性があっても必要になります。

【実例サンプル2】R4.11「まちづかい社会実験“ピンボールを囲もう”」



【実例レシピ2】R4.11「まちづかい社会実験“ピンボールを囲もう”」

① やりたいことを思いつく

道路の既成概念に捉われず一歩超えて、坂をいっぱい使って遊びたい。

② 企画を立てる

パルテノン大通りの坂をめいいっぱい使って、子どもから大人まで遊べる場を設定。また、「坂の傾斜でボールを転がす、新しい遊び方、手作り感、休憩場所」というアイデアワードが出てきて企画化。

③ 企画を詰める

アイデアから「巨大ピンボール」を転がすことに決定、さらに「みんなでギミックづくり、休憩スペース、アンケート、フリーコーヒー」コンテンツを加えた。企画概要書を詰める段階では、道路を使用する企画のため、当日の流れ、場所のゾーニングや配置、通行動線の確保等、現地詳細図面(※)を作成し公的許可申請の準備をした。

④ 必要な手続きをする

公的機関許可申請の手続きをおこないます。道路(大通り)の使用関連申請は多摩警察署および多摩市役所。準備のための、公園の通行利用として多摩市役所への申請許可を得ます。その他保険対応、関連団体への確認等を行います。

⑤ 参加者の募集、準備をする

告知用チラシを作成。市のHPや専用note、SNSを活用して告知発信。今回大型の企画で準備物が多数必要となりました。費用を抑えるために、既存のベンチやテーブルを壁として活用やギミックを参加型で作成する工夫、アイデアが生まれました。

⑥ 当日実施、振り返る

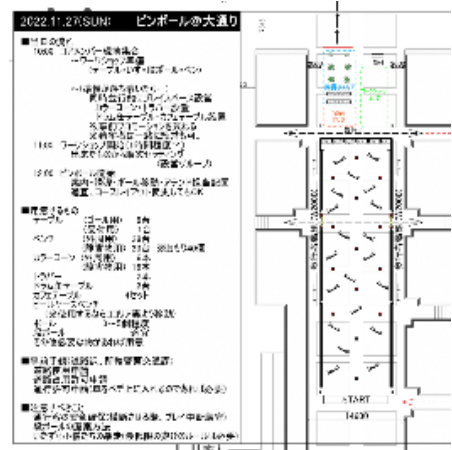
自らが楽しむスタンスは変わらずに、やりながら道行く人に声を掛けながら一緒に楽しむことを心がけました。実際にやってみるとボールがうまく転がらない等も発生。そこからさらに工夫したりと実験しながら参加者と作り上げるイベントを目指しました。参加者からは楽しかった、こんなことができるのだと声が聞こえました。道路を活用するという新しい可能性が見えました。



Point 道路で大がかりな企画をすると、費用が掛かったりや準備物が増えてなかなか踏み出しづらくなります。仲間を巻き込みながら様々なアイデアを出し合い、持ち寄りたりと、実現できることからまずはチャレンジをしてみる事が大切です。

※現地詳細図面 (当日の流れ、配置・動線計画)

まちづかい社会実験「ピンボールを囲もう」では、パルテノン大通りいっぱいを利用したため、右図のような手続き用の詳細図面を作成して提出しました。イベント企画範囲や動線ルートとその幅の設定など詳細に計画しました。



【実例サンプル3】「パルテノン大通りマルシェ」

多摩センター地区連絡協議会(多摩センター地区に立地する企業、団体約40社が加入、事務局:新都市センター開発株式会社)では、新型コロナウイルス感染症の影響下においても多摩センターの活気を継続するため、季節の大型イベントの見直しに加え、ハンドメイド商品を中心としたマルシェを展開しています。マルシェは、多摩センター地区連絡協議会が申請主体となり道路を占有。参加者を公募でつのり、社会実験的に、毎月第2・4土曜日に開催しています。

【実例サンプル4】「多摩中央公園パークライフショー」

令和7年1月に全面リニューアルオープンを予定している多摩中央公園では、多摩中央公園・多摩センター連携協議会が中心となって、パークライフショーの企画・コアメンバーを募集しました。公園ルールや運営管理のあり方を市民と管理者、近隣施設と一緒に考えることを目的に、市民が提案する様々なパークライフを実現する場として、公園を盛り上げる場であるパークライフショーをきっかけとした公園の利活用の主体者が参加しています。

企画・アイデアシート	
企画・アイデア名	公園内こどもロギング
内容 (詳しい企画書があれば別紙で)	制限時間内に、公園内に設置した6つのチェックポイントで写真を撮ってくるアトラクション。昨年12月に多摩中央公園を拠点として実施した「たま公園ファミリーロギング」のスピニング企画。 参加時間: 1時間以内
目的・ねらい (該当するものに○)	①能力向上 ②使い方の提案 ③密着所・息心地の良い空間作り ④運営管理提案 ⑤その他 (具体的に)
希望実施場所 (該当するものに○)	①樹林地と大階段 ②大池前テラス ③大芝生広場 ④外部広場 ⑤旧図書室 ⑥図書館 ⑦パルテノン多摩 ⑧グリーンライフセンター ⑨パルテノン大通り
希望実施時間 (該当するものに○)	①午前 ②午間 ③1日 ④その他()
ターゲット (該当するものに○)	①誰でも ②幼児(0~3歳) ③児童(4~12歳) ④中・高・大学生 ⑤大人 ⑥高齢者 ⑦その他
その他(希望・相談など)	

世代を超えて #2

これまで支えてきた世代と次世代が 一緒に考え、成長するまちのつかい方

【実例サンプル1】R4.12「パルテノン大通り期末テスト」

お試しオープンラボ「多摩センターで何囲む？“机”を囲もう」に参加した市民（多摩大学附属聖ヶ丘高校の先生と生徒）からリアルなまちづかいの声として、「多摩センターでやってみたい」ことの発案から、モデルケースが誕生しました。同校では、今年度から開始した授業科目「地域探究学習」では「多摩市フィールドワーク～課題発見編～」に取り組んでいます。「市民に探究の結果を発表し、多摩市の皆さんにそれを評価してもらおう！」をコンセプトに、2学期末の定期テストを、多摩センター駅前パルテノン大通りで通行中の市民に向けて『ポスターセッション形式でのプレゼン』を実施しました。

4月～ 地域自治推進と高校と会話スタート
7月 WSに先生と生徒参加
9月 机を囲もう
10月 企画検討～各所調整
12月 実施

テーブル・イス
が使える
(常設?)

備品設置
持ち込み?

まちの人と
会話
雰囲気?



多摩大学附属聖ヶ丘高校「パルテノン大通り期末考査」
イベント企画時に作成したイメージ図(案)

【実例レシピ1】R4.12「パルテノン大通り期末テスト」

① 何気ない会話からはじまる

高校生等子どもは、地域の大人と☎話始めるまで緊張があるようです。何気なく気軽に話せるオープンな場づくり、そこから生まれたちょっとしたアイデアを掘り起こします

② 想いやアイデアを具体化

会話→フィールドワーク→アドバイスを繰り返しアイデアを具体化していきました。学生たちから、「地域探究学習」で学んだ「多摩市フィールドワーク～課題発見編～」のプレゼンをまちの方に発表したいという想いが具体的に出てきました。



会話の他にコンテストやフィールドワークなど、学業につなげる切り口でまちを知り考える機会をつくることで、会話のきっかけになるかもしれません。

③ 企画を立てて、関係者と調整していく

アイデアをさらに深ぼり、「楽しいテスト、地域と繋がる、学校の外で授業、発表会、文化祭」といったワードが出て、地域の人が日常使っているパルテノン大通りでやりたいと方向性が決まりました。企画の方向性が出たタイミングで、先生から学校に実施について協議をしていただき、学校関連関係者との調整をしていただきました。



学生だけで企画を一から進めていくことは困難です。関連する大人達が連携し合い、先生と事務局で企画の詰めや調整役を担いながら進めていくことが大切です。

④ 企画を詰める

『期末テストポスターセッションプレゼン、採点受付、アンケート』を企画しました。参加する他生徒や関係者団体への認知理解も得ながら、企画書を作成します。

⑤ 必要な手続きをする

道路(大通り)の使用関連申請は多摩中央警察署および多摩市役所から申請許可を得ます。合わせて最終的な企画内容を学校側および保護者等へのご確認・連絡をおこないます。

⑥ 参加者の募集、準備をする

告知用チラシを作成。学校側にて保護者連絡、HP、プレスリリースを実施。合わせて市側でも協力してHPや専用note、SNSを活用して告知発信。活動実施主体となる学校側に合わせて募集や準備を進めていきました。

⑦ 当日実施、振り返る

学生も大人も準備から一緒になって取り組みはじめました。前例のない新しい活動、全体統括者と担当リーダーを設け、コミュニケーションを密に取り運営実施しました。終了後は振り返り会を設け、次回への継続に向けたアクションを一緒に考えていきます。

※ 振り返り→次につなぐ

高校生や大学生による、多摩市や郊外住宅地の課題解決にむけたアイデア企画が集まってきたことから、多摩市長に向け、選抜された学生がアイデアピッチを実施しました。また、地域の社会人とディスカッションをし、実装化にむけ次に何をするか「行動宣言」をしました。学生のトレンドや着眼点をどのように活かしながら、まずは学生の「行動宣言」をもとに次の“やってみる”につなげます。

令和5年1月15日 学生アイデアピッチ
グラフィックレコード



【実例サンプル2】R4.12.3「公園ファミリーロゲイニング」

多摩地域マイクロツーリズムコンテスト(*)において明治大学ECHOチームより提案された「多摩公園ロゲイニング」は、多摩市の資産である公園を使った企画です。実際に企画提案者である学生がフィールドワークを行い、学生ならではの新たな視点で考えた企画です。令和4年度は、「公園ファミリーロゲイニング」としてブラッシュアップした企画を実施し、新たに地域の人と交流会を行うなど、地域の魅力向上のコンテンツの一つとして実装化を目指しています。

*多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト(東京都市長会助成事業、実施主体(令和3年度):多摩市、稲城市、多摩大学総合研究所、京王観光)は、学生を対象として、多摩ニュータウンという住宅地の魅力を活かしながら、来街を促進する企画を公募し、地域や事業者とのマッチングにより実装化していくことを目的として開始しました。ここで紹介した「公園ロゲイニング」の他、多摩センターの遊歩道上にあるタイルやパルテノン多摩などの建物に着眼したまるで世界を旅行したような気分になれるツアーなどが提案されました

地域の中から外から #3

外から人を呼び込むシティプロモーションと、 内なるシビックプライドを醸成するつかい方

「2030年都市 3つの未来シナリオ」動画より(一橋大学作成)

特設ステージ
リース？



備品設置
持ち込み？

ビジネス
マッチング
スタートアップ？



多摩市は令和3年11月1日の市制施行50周年を機に掲げたブランドビジョン「くらしに、いつもNEWを。」の実現に向けて、国立大学法人一橋大学データ・デザイン・プログラムと「2030年近未来の多摩市の都市像について」の協働研究をスタートし、「未来洞察(フォーサイト)」によって導き出されたイメージをアニメーションにまとめました。

【実例サンプル1】R5.3「タマテク～多摩“まちづかい”テクノロジー万博」

多摩センターがすすめる「まちづかい」を起点とした動きは、東京都の「地域を主体とする東京先進事例創出事業(*)」の一つに採択されました。そこで、東京都スマートサービス実装促進プロジェクトと多摩センターの「まちづかい」の実現を検討してきました。

スマートサービスは、デジタル等の力を活用した都民のQOL向上に資するサービスで、未来のまちではあたりまえになっているかもしれません。

革新的な技術やサービスの展示をはじめ、VRなど実際にサービスコンテンツを取りそろえ、幅広い層の人が楽しみながら最新技術を体験できる、新しい“まちづかい”の提案の場としてテクノロジー万博の開催に協力しました。

(*)地域を主体とするスマート東京先進事例創出事業

<https://www.chiiki-smarttokyo.metro.tokyo.lg.jp/>

【実例レシピ1】R5.3「タマテク～多摩“まちづかい”テクノロジー万博」

① まちの課題やニーズを共有する場をつくる

まちの課題やニーズをさまざまな人に共有する。

② 新技術等ソリューションのネタをあつめる

地域の課題解決やニーズ達成を可能にするソリューションのネタを集める。



新技術等、すぐには地域課題や企画に必要と判断できるものではなくても、スクラップブックをつくる感覚で多種多様なネタを集めよう。

③ まちとソリューションの組み合わせを考えてみる

まちの主体者とソリューション提供主体者がマッチングしそうな予感を感じたら、小さくチャレンジしてみる

まちの人に体験してもらう機会をつくる

未来を先取りしているものは、「体験」の機会をつくり、新しいまちのつかい方を考えるきっかけをつくる。

④ まちの課題・ニーズへのリンクを検証→次につなげる

新しいアイデア、外からの「やってみたい」とまちの課題・ニーズがWinWinになっているか、次に何をすることが必要があるか検証し、次の企画につなげる。